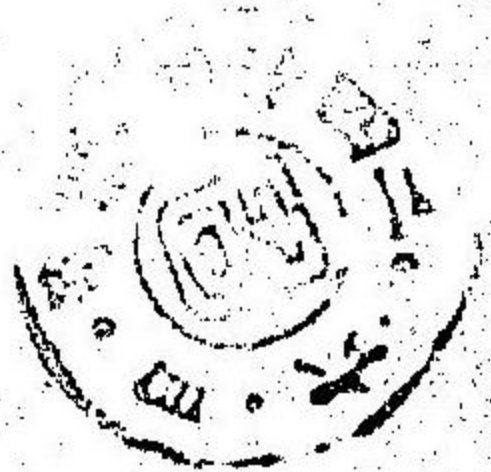


自序

琉球語は支那語の一派ならんと思ふは謬見なり、琉球の文化は明清文化の餘流ならんと思ふるは誣妄の甚しきものなり、抑も琉球の言語組織は日本古言と其系統を同し、琉球文化の内容は明清の影響を受けたること寧ろ僅少にして、其實質は日本の感化を被むれること頗る多大なるものあり、試に琉球に於ける上古の神歌と中世の韻辭と現時の俗謠等とに就て仔細に玩味し來る時は何人も思半はに過くるものあらん、此篇小なりと雖も聊か琉球古今歌文の秀逸を網羅したるものなり、琉球の藝術を解せんと思ふ人は宜しく一讀すべし、庶幾くは琉

加藤三吾

自序



琉球思想界の傾向を窺ふに足らん乎

窓外に平戸海峡の潮聲を聴きて深更燈下

明治三十九年晩秋

卒土濱人

加藤三吾記す

琉球の研究 下巻

目次

第一章 沖繩の言語

第二章 神歌

一、をもち

○きこゑをふきみがをもち

二、をむい

○海神祭のをむい

三、をがんつゝ及をたかべ

○みやだいらのをがんつゝ

○麥初種下のをたかべ

四、くゝいに

○うりぢんくゝいに

第三章 琉歌

- 一、短歌 四十三首
- 二、仲風 二首
- 三、長歌 二首
- 四、口説 三首

第四章 俗 謠

- 一、押太鼓ふし 二
- 二、國頭さばかり 一
- 三、子守歌 三
- 四、童謠 二
- 五、流行歌

○德利

○平良辻の茶賣

第五章 戯 曲

- 一、狂言

二、組 踊

○老若の縁組

○手水の縁一名波平山

第六章 和文及和歌

- 一、苔の下
- 二、短歌 八首、長歌 一首

第七章 碑文、候文及漢詩

- 一、ようこれのひのもん
- 二、琉球國新建至聖廟記
- 三、獨物語 二ヶ條
- 四、御教條 五ヶ條
- 五、漢詩 八首

琉球の研究

下巻

加藤三吾著

第一章 沖繩の言語

昔から沖繩には文字なく、神歌や物語などは凡て口から唱へ傳へたものである。(カタカ子)と呼ぶ符號あるけれども、これはむかし(ユタ)といふ巫戀が用ゐるに過ぎないもので、(カンナズミ)と呼ぶ一種の數字(ヤーナ)と呼ぶ紋様の家號とは、今も尙ほ國頭地方農夫の間に行はれてをり、島民の一部は現に繩を結んで大小の數を記算し、與那國島に一種の象形字あつて市場に使用されてをる、けれども之等は共に沖繩の文字と名つくべきほどの價值あるものでない、七百年前に舜天が自立した頃、いろは四十七文字始めて輸入し、五百年前に閩族三十六姓が久米村に移植せられた頃から漢字も流行するに至つたと思はれる、それから天文年間に(オモロ)雙紙が平假名で書かれてから、古來の神歌も口傳の韻語も記録として存することになり慶安三年に向象賢が中山世鑑を撰してから和文

体の歴史始めて成り、古老の口碑を書き集めた遺老傳も此時に編せられて、候文体の仕置書も出つるやうになつた、

予は茲に最も古い神歌から順次に下つて現時の歌謠雅文等を列擧し、一は以て沖繩に於ける言語風俗の變遷を考ふべき資料に供し、一は以て琉球に於ける文藝發達の一斑を窺ふべき案にしようと思ふ、しかし先づ順序として沖繩の言語に就て少しく述べねばならぬ、始て沖繩に渡りて其方言を聞けば、何人も容易に解し難いからして、或は南蠻煙舌と嘲けり或は支那語の一派ならんなど、速断するともないに限らぬ、勿論琉球久しく支那と交通した結果として、名詞の幾分に支那語を認めることあるけれども、動詞や形容詞などは全く本邦語の轉訛したもので、其語法に於ても動詞は常に目的たる名詞の下に来ることは本邦語と異なることなく、却て本邦古語を其儘に存することが多いのである、又其言語の性質を檢しても、支那語の如く一音一語をなす所の單綴音語でなく、實に本邦語の如く數音組合つて一語をなす所の複綴音語であることが知られて、所謂(ウラルアルタイ)語系に屬すべきものである

抑も、時代移るに從て言語變し地方異なるに從て方言

同しからぬは免れ難いこと、本邦西南隅なる薩州又は沖繩の方言と東北隅なる奥州又は蝦夷の土語とは著しい差異あるけれども、或點に於ては却て一致するものがある、思ふにこれは往昔一般に行はれた言語が、中央地方に於ては既に幾回の變遷を経て全く其跡を絶ちたるに拘はらず、僻遠の地方に於ては尙ほ昔時の古語を其ま、保存することがあるからであらう、

試に、(ハ)行音に就て考へて見ても、古音の(バビフベボ)が一轉して(ファフィフッフェフ)となり、再轉して(ハビフハボ)となつたことを事實とすれば、本邦の東北隅と西南隅とに其古音の痕跡を存してをるやうである、即ち奥州で、日と火とを(フ)といふと同しく沖繩人も(フ)と發音する、(アイヌ)語で、(ピラ)又は(ピラ)が絶壁を意味すると同しく、琉球語で、阪路を(ピラ)又は(フィラ)と呼ぶ、其他に國頭地方で、舟を(ブニ)、鳩を(ボト)、畑を(バタキ)といひ、八重山嶼では、母を(アッパ)、人を(プト)といふなども注意すべきものであるまいか、それから又、九州は一般に

(ラリルレロ)を(ダヂツデド)に轉するが、沖繩にも此訛音がある、特に琉球語には約音と拗音が頗る多く、例へば神名の(キコエオフギミ)を(チフィチン)と發音し、村名の(ホモエイ)を(ピン)となし、何々ニテアリハベル)といふべきを(何々デエベル)となすやうなことが多々あつて、(カキクケコ)若くは(タチツテト)を(チャチチチュチョ)に變化する場合頗る少なからぬことも、沖繩の言語が缺舌のやうに開ゆる原因である、

第二章 神歌

神歌は沖繩上古の韻辭で、其用語は一般に(カミンチュクトバ)即ち神職語と呼ばれ、今日では既に死語に屬してをるものである、就中、(オモロ)は最古のもので、(オムイ)之に次ぎ、(オガンツ)、(オタカベ)又之に次ぎ、(クワイニヤ)に至つては割合に新しい語であるから、多少は現今の俗語をも交へてをる、けれども尙ほ(カミンチュクトバ)に屬すべきものである

(一) をもろ

(オモロ)は古來沖繩に傳はる神歌で、祭の時に神を崇

へる歌や祝の時に唱ふる詞なども含み、神歌中の最も古く最も神聖なものである、(オモロ)雙紙と呼ぶ冊子には、總數一千五百餘首の(オモロ)を記してをるが、之は古から(ノロクムイ)等の口傳に因て沖繩各村に散在してをつた不文の(オモロ)を三百七十餘年前に始めて本邦平假名で書き集めたもので、寶永七年に書き改めたのが今も尙ほ保存されてをる、冊數は二十二冊で、第一冊は享祿四年、第二冊は慶長十八年、他は元和九年に出來たものである、

宜野灣間切大山村安仁屋氏は、代々(オモロヌシトリ)といふ役で、(オモロ)雙紙を保管し(オモロ)の謠方を傳へ(オモロ)に關する儀式を掌り來たのである、(オモロ)の詞は甚だ古雅で今の沖繩學者も容易に其意味を詳にすることができない、(オモロ)主取は之を謠ひ得るけれども之を解することができない、茲に擧ぐる一例は凡て古い雅言を以て綴られ凡て對句の調を存して凡て韻をふんで凡て口唱に都合よいやうに作られてある、

○かいらをふきみがをもろ

○かくらとよてがふし

- 一、きこるをふきみ(神名)が、とよむせたかこ(神名)が、みしまいのられ(國土ヲ祈ラレ)、
- 又、しよりもり(首里森)ちよわる(御座ス)、またまもり(眞玉森)ちよわる(御座ス)
- 又、なさいきよもいあんしをそい(親父ノ如キ按司サマ)、あがかいなであんしをそい(我が親愛ナル按司サマ)、
- 又、をふきみよ、いきよて(行會テ)、せたかこよ、よてつて(寄合テ)、
- 又、ゑそこ(舟)なよ(繩)、こよわちへ(整ヘテ)、みをふね(舟)なよ(繩)、こよわちへ(整ヘテ)、
- 又、あまのはこらしや(目出度サヤ)あまのまうれしや(喜ハシサヤ)、
- 又、よひきこみ(舟)をしうけて(浮ベテ)、せちあらとみ(舟)くりうけて(浮ベテ)
- 又、せつきとみ(舟)をしうけて(浮ベテ)、くもことみ(舟)くりうけて(浮ベテ)
- 又、まやいとみ(舟)をしうけて(浮ベテ)、をじあけとみ(舟)くりうけて(浮ベテ)

又、たけく(岳々)よ、いので(祈テ)、もりく(森々)よ、いので(祈テ)
 又、あをりや、とりよわれて、をりや、とりよわよる。
 又、あそこかず、つけわちへ、みをうねかず、つけわちへ。
 又、そさん(波)なごやけて(和ギテ)、あをなみよ(大波ヲ)ごりやちへ(止メテ)。
 又、をしうけかず、みまぶら、くりうけかず、みまぶら。
 又、きみくしよ、ゆしらめ、ぬしくしよ、よしらめ。

(二) をむい

(オムイ)といふのは、(ノロクムイ)などの神職が其奉仕する(オタケ)や(オガンノモリ)の神に對して、祈願又は報謝の意を述べるもので、一種の祝詞である、其語は(オモロ)に比較しては時代稍や新らしく、今の人も多少は之を解することができ、けれども尙雅言や死語

などを混してをるために、所謂(カミンチュクトバ)として普通には解し難いもの、類である、思ふに最も古い(オモロ)の語を(ノロクムイ)等が口から口に傳誦する間に、次第に轉訛して多少の俗語を交ふるに至つたのであらう、其一例、

○海神祭のをむい

もごむかしあたること、あまみよにひちることい、(古キ昔ノ世ニアリシ事ヨ)
 なごもりのをふかみ、よやげもりのみよつき、すがまもりのすじく、(ナゴ森、ヨヤゲ森、スガマ森、ナドノ神達)
 なごもりにかみよやいみしうち、すじよやいみしうち、(ナゴ森ニ神寄合ナサレテ)
 やまごかみがしま、よふんうきしま、あらぶはるしま、いへやちいしま、(大和ヤ輿論ヤ永良部ヤ伊平屋ナドヲ語ル意)
 いそうエけがいであちこと、こがねじやくわちる、たまうエけがいであちこと、なんぢやくわちる、(磯殿王殿ノ出立テアルカラ金銀ノ盃ヲ酒宴スル)よみのはまにやういで、なんかはまにしちりい

でて、(弓ノ濱、七日濱ニ集リ出テ)

あけしけしあけし、ぶんのねのあけし、あけしけしあけし、たけがねのあけし、(彼處此所ノ蜻蛉ヲ呼ブ意)、

うらめぐりめぐて、じゃんのくつふむく、(鰐魚ニ乗テ浦廻スル意)

をしかせにふかさん、てるてだにてらさん、(順風ニ吹カレ和日ニ照サレ)

うさなごりみしうち、ざりこいみしうち、(魚介ヲ漁リナサレテ)

とぐちをふいさあんど、みなごをふいさあんど、(渡口水門ノ寒キヲ告グル意)

なまやうしほみちうち、なまやうしほみちうち、(今ハ潮ガ満テ居マスカ、干テ居マスカ)

たれちしびぬらさん、たれはかまぬらさん、(垂紐ヤ垂袴ノ水ニ浸ルヲ戒ムル意)

なつたうみわたりたばれ、(海上安全ヲ祈ル意)

あがりごしま、あがりやしま、(東方ノ島々ヲ數フル意)、

をんこい、(御見送り)

神歌

をがんつゝ及をたかへ

(三) をがんつゝ及をたかへ

(オガンツ、)は、城中で祝の儀式に、神職が神に謝する詞で、(オタカベ)は、(ノロ)等が神に告げ又は願ふ時に唱ふる詞である、其語は共に(オモロ)よりも(オムイ)よりも更に通俗であるが、多少の古言を交へてをるので、尙は(カミンチュクトバ)と稱すべきものである、其例、

○みをやだいのをがんつゝ、

みをうみのけやべら、をがんにんすのど、みをうみのけらしむしいべる、(御願ノ者共申上仕マヌル)けふのよかるみひよいに、みをやだいのをがんをがみやへすに、(今日ノ吉日ニ宮仕御願仕リマヌルニ)

をふこをりのをさしきをがまれみしうち、をのうへにみをしやくをたばいみしうち、もすですですらしみしうち、(大庫裡ノ御坐敷拜見イタサレマシテ)其上ニ御酒ヲ下サレマシテ、千万辱ケナク、つきくのものまでみきをたばいみしうち、もすですですですらしみしうち、このごをんごうごを

(次々ノ者マデ御酒ヲ賜ハラレテ、此御恩貴トサヤ) ぎをふきみみをめへかなし、ともともをまがまれみしうるをかほう、をみぐをすてもものもすへのをかほう、(王母様御子様方ノ幾久シクセラレラル、御果報)

よるむひるむ、かめねかいしちて、みやたいりやきもすいたいすい、がらめきみやすらんたいて、(晝夜ヲ兼ネテ仕官ハ肝ニ銘シテ奉公仕ラントテ) しっかいのをがん、みをうみのけらしむしいる、(皆々祈リ申上奉リマヌル、)

○ 麥初種下のをたかべ しりてんじやなしから、よかるひより、まさるひより、いらいいたち、そりいたち、みをとをたべみしうちこと、(首里王様カラ吉日ヲトシテ仰セ下サリマシタノデ)

のちかねし、かねや、みちびからよかびから、みかきいで、そりいて、(下々ノ者ハ毎日モ潔齋シテ)、をかまがなしをめへ、をかみのをめへ、をそばよてをとりつぎ、せんかみはい、まんかみはい、をかみやべん、(火神サマ御神サマニ頼リマシテ千拜万拜)

ので、最も通俗なのは

いめちかわさごめ、ごじもたちたーばれ、ころやーすくこと、をーちちちーべーち

(彼方ニ參ラレタナラ郎君ヨ、御手紙ヨコシテ下サレ、安心シテ御待申シマシヨウ)

といふのであるが、古來傳はる(クワイニヤ)に至ては、普通の婦女に記憶するものなく、唯た(チドイ)と呼はる、女は能く之を諳してをるので、依頼に應じて音頭を取り他の婦女は之に和することになつてをる、即ち老幼の婦女共が團欒して一場に集まり、手拍子を合せて諳ひ、足拍子を取て踊りながら丸く回るを例としてをる、

古い(クワイニヤ)の中で、(アガリユウ)は知念玉城森々岳々の威靈をた、へたもの、(オフグシク)は柑橘の美果を賞揚したもの、(ウリジン)は布織の事を諳つたもの、(ヤラシイ)は靈鳥を捕へたよしを述べたもの、(カチグシク)は家造の祝を表したものであるが、何れも吉事や雅言を撰んで歌にしたもので、概して對句より成り、現今の俗語と多少異なる所あるけれども、よほど近代の言語である、茲に其一を擧ぐ、

仕リマス) あらむきや、はつむきや、のはるのみにいだち、まきちらるや、(新麥を野原ニ撒キマスカラハ) むしけがらは、あかりやがしちにをしくみて、をたびみしうわれ、(毛虫ハ赤茅ノ下ニ押込テ給ハレ) あをもとにむいたて、あかもとにむいたて、ほうみしうみ、とりまさいるりまさい、をたばいみしうわれ、(青莖カラ赤莖ニ育テ上ゲテ、見事ナ麥穗ガ澤山探レマスルヤウニシテ下サレ) しちてるまきれば、ちもぶくいあたりて、もことしきやて、せんとしきやて、せんがみはいまんがみはい、をかみやべら、(天ガ下ハ何處モ仕合好キヤウニ百千歳カケテ千拜万拜仕リマシヨウ)

(四) くついに

(クワイニヤ)といつて、家族中に旅立する者あつた時、道中の安全を願はんためと、留守せる家人の愛情を慰むるために、出立後三日間は親族知人集まり來て歌ひ合ふ詞がある、現に首里那覇の婦女間に行はるゝも

○ うりぢんがはつがをう、わかなががまはだをう、(二)

三月ノ初芽、初夏ノ眞芽)、 またけくうだつて、またけいやびつて、(眞竹ノ管、眞竹ノ矢ヲ、作ツテ)、

をはながたひきぢぢち、ばらんがたぬきぢぢち、(花形葎形ヲ抜き出シ)、

やまごからくだゆる、かねのわのみをうぐち、(大和カラ下ツタ金環ニ通シテ)、

をそばひきよせて、をめるにひきよせて、(御側ニ御前ニ引寄せテ)、

はたいんをやんみんち、んむんをやんみんち、(機糸ノ組糸ニ編ミテ)、

つみなかへつんち、わくなかへくゆけて、(紐ニ紡ギ框ニ纏テ)、

よかるひゆいらで、まさるひぬきぢぢち、(吉日ヲ撰ミテ)、

どひるかすかけて、やひるかすかけて、(十尋八尋ノ經カケテ)

はていんふごちのちけて、んすんふごちのちけ

なぐぬうふがにく、うまはらさいしうしや、ふには
らちいしうしや、わうらうま

(名護ノ大濱ニ馬乗スル面白サ、我が浦曲ニ舟
遊スルモ亦面白シ)

○ちんふし

同

わすたやんばるぬ、あだんふぬむしる、しかばるら
みしうれ、すいぬしぬめ、

(我等田舎ノ「あだに」葉ノ庭、敷キマスカラ御
着座下サリマセ首里ノ旦那様)

○いねまつんふし

同

くとしもつくいや、あんどちるよかて、くらにつん
あまち、まつんしやべら

(今年ノ耕作ハ何タル見事ナコトヨ、倉ニ積ミ
餘リタレハ穂積ニセバヤ)

○しっくいふし

同

くゝるあてからや、うみやまんすくむ、たつねらな
をちゆめ、ありがゆるる

(心カケタ上ハ海山ノ底モ、尋チズニ置カンヤ
彼人ノ行方)

○はなふうふし

同

てるにちやちやちや、やすぬみぬしぢしや、かしぢ
いなづま、てしやいまにげ、

(手巾ヲ打振レハ人目多シ、頭ヲ押ヘルニ托シ
テ手ニテ招ゲ)

○

尙寮王母

てるてだにでんし、てらるるこしすが、やすしなぬ
なれや、そにあぬら

(照ル日ニサハ當テヌヤウニシタガ、他郷ノコ
トナレバ定メシ浮目ニ會ヒ居ラン)

○

尙寧王妃

にしかにぬまにし、ふちつみてうれば、あじすへめ
てだぬ、みなちまらる

(真北風ガ吹キツメテ居ルカラ、按司王殿ノ御
船ヤ待チ焦カル)

○

尙質王

とふるやにうてん、やふるやにうてん、ちむち
むらめ、あじむげすむ

(十尋屋、八尋屋ニ居レバトテ、心ト心トゾヤ
按司モ下司モ)

○

尙敬王

わがみつてみちぢ、やすぬうやしゆる、むいするな
うちよ、なまけばかり

(我身ヲ抓テゾ他人ヲモ知ラレル、無理スルナ
浮世ハ愛ヲ第一トス)

○

尙泰侯

さかていくなかに、つししまなよめ、よかるほご
いねや、あぶしまくら

(榮ハ行ク中ニ慎マズバナルマイ、ミノリ善キ
稻ホド畔ニ頭ヲ垂ル)

○

名護親方程順則

ほめられんすかん、そしられんすかん、うちよなた
やすく、わたりふしやぬ

(譽メラレルモ好マヌ毀ラレルモ好マヌ、浮世
ヲ安タト渡リタシ)

○

具志頭親方蔡温

ほまりそしられや、よぬなかねなれい、さたんねん
むのぬ、ぬやくたぢか

(譽ラレ毀ラレルハ世ノ常ナリ、何沙汰モナキ
モノハ何役ニ立ツカ)

○

本部按司朝敷

そらにふすすちる、かすでんしにはぬ、まつにをど
つれぬ、あるよやすが

(空ニ吹キヌキル風デサハ庭ノ、松ニ音信ノア
ル夜デアルガ)

○

平敷屋朝敏

しかいなみたて、すりりみつなちも、をまこや
あま、かきもたらぬ

(四海ニ波立テ、硯水ニナシテモ、思フ事數多
クシテ書キ盡サレヌ)

○

仲島よしや女

たぬむよふきて、うとつれむねらん、ふちい
まぬふぬ、つちにんかて

(頼ム夜ヤ更ケテ音信モナシ、一人山ノ端ノ月
ニ向ヒテ)

○

今歸仁朝敷

かじたぬでわたる、うちふにぬなれや、くゝるまほ
ふちむ、じゆむならん

(風ヲ便リニ渡ル浮舟ノ習トテ、心ノ真帆引モ
自由モナラヌ)

○

護得久朝置

むねうちぬたまぬ、ふかいねんをちゆめ、たごへよぬなかな、くらくなてん

(胸中ノ玉ノ光無シニオコウヤ、タトヘ世ノ中ハ暗クナルトモ)

又吉全道

もぬよをみまじし、ふゆのよぬそらぬ、つちになちわたる、はまぬちぢい

(モノ思増スヤ冬ノ夜ノ空ノ、月ニ鳴キ渡ル濱ノ千鳥)

伊江朝常

をまんちぬまぎり、くろうちひらけ、しりぢやなしをため、なゆらでむぬ

(萬民ノ凡ラハ心ヲ打チ開ケヨ、首里王様ノ御爲ニナルデアラウカラ)

金武朝芳

まごるめばゆめぬ、よびうくち、ふいねぬよいや、あかしぐれし

(マドロメバ夢ニ呼起サレクテ、一人寝ノ宵ハ明カシ苦シ)

山内盛熹

みよぬをふかいに、みやますむふ、こん、まみちふでんつる、くごぬしヨラシヤ

(御代ノ御光ニ深山住ム人モ、眞道踏テ出ルコトノシホラシヤ)

佐久本喜章

ゆめぬこぬせけに、ぬよでまたゆめぬ、んかしくとまでん、みしてくよか

(夢ノ此世ノ中ニ何トテ又夢ノ、昔事マデモ見セラ呉レルノカ)

伊保まうし女

んかしよしやたや、うまれたるしるし、はなぬあるかきり、さたよぬくて

(音よしや達ノ生レタシルシニ、花ノ有ルカギリ評判ノコル)

讀人しらす

ちぢぬなかんち、うとしあなちくて、ごんぼするさごめ、うごちみぶし

(辻ノ中道ニ穿テ造テ、浮氣スル郎ヲ落シテ見タヤ)

同

あめのふらくや、てんもやうかわて、ごまいまそたちや、さなじぬがち

(雨ハ降リソツニ天模様ガ變ツテ、泊浦ノ鹽作ル人共ハ下帯ノ脱ゲルヲ知ラヌ)

同

うくちゆちかふし、よすしらくちゆな、みるふ、ごやうんじ、ふいいでむぬ

(見送シテ呉レテ難有シ他人ニ知ラセテ呉レルナヨ、見テ居ル人ハ「そなた」一人ダカラ)

(二) 仲風

(ナカフウ)は、普通の琉歌よりも句較や短かいけれども、情は却て長きを覺ゆる、これは琉歌から脱化した奇抜なものであるが、今はあまり行はれてをらぬ、例二

○ 讀人しらす

かたいたやく、つちぬやまぬふに、かゝるまでん

(悟リタヤ、月ノ山端ニ懸ルマデモ)

琉歌 仲風 長歌

○ 同

つちやんかしぬつちやしが、かわていくもぬや、ふいごぬくる

(月ハ昔ノ月ナルガ、變リ行クモノハ人ノ心)

(三) 長歌

長歌は、普通の琉歌よりも句長く調も優で、節は緩なものもあり急なものもある、これも琉歌の變体と見るべきである、別に(ツラチ)と呼ぶ韻文もあるが茲に略す、長歌の例二

○ ながきんふし

ゆうまぐりなりば、ちむんちむならん、(夕暮ニナレバ心モ心ナラス)

うむかじやいちぐ、わがすぢにすがて(例ハ何時マデモ我補ニ殘テ)

あわりくらざらん、たあしにまかち(逆モ堪カテ唯足ニ任セテ)

あゆみちしはぬ、あゆみちしはぬ(歩ム路柴ノ露ヨリモ多ク)

しぢぬらちふふ、しぬでいくさちぬ

(袖ヲ潤ラシテ人ヲ忍ビ行ク先ノ)

はてやしらくむぬ、いぢがなゆら

(果ハ白雲ノ如何ニナルヤラン)

○ゑらぶふし

としやたちかへて、はるぬそらはりて

(年ヤ立カエツテ春ノ空ハ晴レテ)

うしかじむた、ん、なみぬくむねらん

(風モ立タズ波ノ聲モナシ)

でかようみわらび、うしつりてたげに

(イデヤ童兒ヨ伴イテ互ニ)

はなむやいあしは、わかたつてあしは

(花ヲ採リ若菜ヲ摘テ遊バン)

(四) 口説

(クドキ)は、用語も句調も凡て本土式であるから、琉歌の中で最も解し易く最も新しく種類も亦多く、主として琉球人と薩州人と同席の宴會に誦はれるものである、なるたけ薩の發音に従て誦ふを本則とす、例三、

○のぼり口説

旅の出で立ち観音堂、千手観音伏し拜がで、こがね杓とて立別から、袖にふる露をし拂らて、をふと松原歩ゆみ行く、行けば八幡崇元寺、みるじ高橋うち渡たて、袖を連ぬるもろ人の、行くも歸るもなかの橋、沖の寺まで親子兄弟、連れて別ゆる旅衣、袖と袖とに露涙、船のごも綱とくくくと、舟子いさみて眞帆ひけば、風やまごもに午未、又のめぐりは御縁とて、招く扇やみゑぐすく、ざんば岬をあとになし、いへやと立つ波をしそへて、途の鳴々見渡せば、七嶋となかや灘安すく、立つる煙は硫黄嶋、佐田の岬にはへ並らで、エイ、あれに見ゆるは御開聞、富士に見まごう櫻嶋、

山川やひつて鹿兒嶋までも」

○くだり口説

さても旅ねのかり枕、夢のさめたる心地して、きのふ今日とは思へとも、九月なりぬれば、やがて御暇下されて、使者の面々皆揃て、辨才天堂ふし拜がて、いざや御假屋立出て、滞在の人々引列れて、かごやの濱にて立別ら、なごりをし出る舟子共、喜び

勇みて帆を上げぬ、祝の盃めぐる間に、山川港に走

入れば、船の改すんで又、碇ひきのせ眞帆引けば、

風やまごもに子丑の方、佐田岬もあとに見て、七嶋

途中もなだやすく、波路はるかに眺むれば、あとや

先にも供船の、帆引つれて走り行く、道の嶋々立つ

つき、伊平屋ごたつ波をしそへて、殘坡岬もはいな

らで、ありく拜む御城下、辨の御嶽も打つつき、

エイ、袖をつらねて諸人の、迎に出たや三重城、

親子引つれて昔里にのぼる」

○四季口説

扱も目出度や新玉の、春は心も若がいて、四方の山

邊の花ざかり

のどかなる世の春を告げくる谷の鶯サーッサ

夏は岩間を傳へ来て、漣つふもごに立よれば、あつ

さわすれて面白や

風も涼しく袖に通いて夏もよそなる山の下影ッ

サーッサ

秋は尾花がう打招ぐ、園の眞垣に咲く菊の、花のい

ろく珍らしや

錦さるると思ふ許りに秋の野原や干草色めくサー

ッサ
冬はあられの音をへて、軒端の梅の初花は、色香もふかく見てあかぬ
花か雪かといかて見わけん雪のふるへに咲やこの花サーッサ

第四章 俗 語

俗語は、沖縄の都鄙、男女、老幼の間に行はるゝ歌を集めたもので、用語は現今の琉球語である

(一) 押大鼓ふし

田舎には、上古に(コネリ)、中古に(シノグ)といふ舞踊あつて、村の鎮守森の神を感むるため、男女打つとい大鼓たたき歌い踊ることもあつたが、今の(ウシデイク)といふのは恐らくは其遺風であらう、例二、
ちとでしゅしたいめ、うといつちしやべら、あまん
ゆぬしぬぐ、うゆるちみしうれ
(地頭代旦那様御取次イタシマセツ、昔ノ世ノ「しのぐ」御許シ下サリマセ)

(一) 徳 利

とくくいぐーよまきくいぐー、まーからんぢたうとく
くいぐーちぶやぬかまからんぢたう、かれよしとく
いぐー。

(徳利ヨ、何所カラ出タ徳利カ、壺屋村ノ窠
カラ出タ、目出度イ徳利ヨ)

(二) 平良辻の茶賣

『テトトン〜といふ蛇皮線の拍子につれて、(カ
ミヂヤ)と(サンレ)と呼ぶ二人の田舎男が旅姿で一
方より出る、同時に二人の妻女は他方より出る、
四人差向いて足拍子とり、男と女と交る〜進み
出て踊る、歌に』

女、すいなふーに〜らわ、いたづらさげぬみち
しみんそーれ、わたーすー。

(首里那覇ニ参ラバ、色ト酒トヲ謹ナサレ、我夫
ヨ)

めーるうらぬしーわや、うりるやんど、みむちて
いしつかんぬんど。

(参ル間ノ心配ハ、ソレデスヨ、身持ガ大切デス
ヨ)

男、しわんすなばーちた、ちゅうやんぢ、あぢやるぬ
ふーさけいてちゅうくと

(心配スルナ妻共ヨ、今日ハ行テ、明日ハ其足デ
直グ歸テ来ルカラ)

女) ちゃんこいみーせら、てらんちじぬぶてがじまる
ちしちやゆーゆし

(茶ヲ買ナサルナラ、平良辻ヲ上テ榕樹ノ下ニ)
かぢたゆてぬーちる、んみがちからこーてめん
それぬでんだ。

(影ヲ便リテ居ル、娘ノ茶ヲ買テオイデ、呑デミ
ヤウ)

『これにて女共は引込む』

男、んみぐつちやわかーわて、しいさあまさぬあさぬみ
ーくわや

(娘茶屋ノ方ニ回テ番茶ヲ買フヤ)

はなしするうーち、すいはいちよさかみぢ
ふー、でちややとぐんかい。

(話スル中ニ、首里ニ早ヤ来タヨ龜兄ヨ、イデ宿
屋ニ行コウ)

『これにて男共は引込み、入代テ平良辻の美人

茶賣鶴女は、茶を盛大大籠を両手で頭上に捧
げて出で来りながら』

鶴、わんどていらんちじ、ちゃんうゆるちるごやいび
トしが、

(私ハ平良辻ニ茶ヲ賣リ居ル鶴デゴザイマヌガ)
とちうすくなーとて、ふーくまらかいんぢていち
わごやるじよにじなそー。

(時刻遅イカラ、ドレ早ク町ニ出テ行キマセウ、
オヤ十二時ニナツテ居ルヨ)

『と言テ、茶賣の鶴は宜き所に座る、男共は再
び出て来て』

男、ちゅうやしますーがい、ちゃんこていかなかみぢふ
いでいらんぢよ

(今日ハ歸ル序ニ、茶ヲ買テ行フテナイカ龜兄ヨ
平良ニ出テサ)

しけんごゆまーれる、んみぐつしがたやかみかふと
きか、エサさんれ、サツテモ。

(世間ニ評判ノ、娘姿ハ神カ佛カ、オイ三良、ナ
ルホド) 『と言テ、茶賣に見とれる、茶賣は兩
人に向ひて』

鶴、ちゃんこいんせーら、うまさちやーぬあくと、やく
みたこーらに

(茶ヲ買フナラ、好イ茶ガアルカラ、兄サン達買
ヒマセンカ)

『男共は茶賣の前に行テ』

男、ちういにちんーちと、はなぬこーからかけてうみ
しーうれ、でいねいらんぢ

(一人ニ二斤宛、「花の香」ヲ目形カケテ賣ナサレ
、代ハ幾ラデモヨイサ)

『茶賣は番茶二包を男共に渡す、男共は大
きな紙幣を出して』

男、ちゃんこい、ごいみそーれ
(茶ノ代、取リナサレ)

けいしむごしや、なまやねーらんしが
(オツリガ、今アリマセンガ)

しまびーいさ
(ヨロシイヨ)

『茶賣はソコ〜に籠を捧けて立上り、引
込ながらに』

鶴、ちゅうやふりむんいーちて、いーあちね、しちや

さふくやんかい、いちわごやる

(今日ハ馬鹿者ニ出會テ、好イ商賣シタヨ、ドレ早ク家へ行キマセウ)

『後に男共は、彼方に向ひて』

男、すいからや、なまごちうしが、やーやたんうらぬかや、ばーちーよ

(首里カラ、今戻ツタガ、家ニ誰モ居ランカ、妻ヨ)

『ご手を打てば、以前の妻二人出て来て』

女、いみんみー、みーけいし、まらかにてうたさ、わっ
たーすーいみそうれ

(夢ヲ見、夢ミ返シ、待カテ居タヨ、我夫オハ
イリヨ)

『ご言て、イソ〜と先に立て引込めば、男共
は其後姿を指さして、手を振り頸を縮めて笑
ひながらに』

男、んみぐッしがたど、ごじぬちやど、みあわしんれば
、エイ、さんれ、

(娘姿ト、妻ノヤツ等ト、比べテ見レバ、オイ三
良)

んみぐッしがたや、かみかふときか、たいごじ、
やらんむぬ、いるま〜くる、しぶうーぢぬいる、
アキサメサメ、

(娘子ノ姿ハ、神カ佛カ、兩人ノ妻ハ、焼芋ノ、
色ハ眞黒、濼團扇ノ色、イヤハヤ〜)

『ご言て、兩人揃て頸と手を横に振る』

(をわり)

第五章 戯曲

琉球戯曲の起原は、百八十餘年前の享保年間に在て、
其の組織は全く本土の謠曲能樂に模倣したもので、其
脚色も到底幼稚たるを免れないけれども、兎に角、
琉球固有の言語を以て琉球獨特の思想を發表したこと
、琉球史上の口碑傳説が琉球の文士劇家に因て巧に
詩化されたこと、琉球の人情風俗に關する半面はこ
の狂言を介して微妙に描寫されたこと等は、たしかに
注意を喚起すべき價值がある、茲に琉球戯曲を分つて
二とす、一を狂言といひ二を組踊といふ、

(一) 狂言

琉球の芝居に演せられる狂言は、概して淫猥でなければ
妖怪談で、到底見るに堪へんもの多數であるが、茲
に擧ぐる一は、全く琉球式で、比較的意味のないもの
である、用語は現今の方言そのまゝである、

○老若の縁組

『ドン〜と大鼓の音が聞へて、髻を額上
に結び、衣裳をダラシナク着た、ヨイ〜の
馬鹿婿が出る』

婿ごの

わんねー、〇〇按司ぬ次男、やまごいやる、くと
し三十五なごーしが、〇〇親方ぬうエなぐんぐわ、
ちるーごいんぐみしまちあんでーせー、わー父親
ぬ遺言や〜ちんご、ごないぬうばまーたぬで、
くんりーぬせーすくさねーならぬ、

(我ハ、〇〇按司ノ次男、山戸デゴザル、今年
三十五ニナツタガ、〇〇親方ノ女子、鶴ト縁
組ノイヒナツケアルコトハ、我父親ノ遺言デ
アルカラ、隣家ノ叔母様ニ頼テ、婚禮ノ催促

セニヤーナラヌ)

『ご言て引込む、やがて叔母は出で、〇〇
親方の家を訪ふことあつて、鶴子嬢の母
に會ひ縁談を始める』

母親

う〜うご、めんせーたるうち、やくすくぬあた
んでち〜ち、ヨーやびーしが、ちるんでなま十五
ぬわらび、むーこんで三十五やくと、ご〜ごんと
しぬちがて、しけんぬむぬわれ〜ごなやびーれ、
ごーでんくぬいんぐみー、ごいやみてんでうむと
ーやびーさ、

(我夫、存生ノ中、約束ノ在タノヲ承知シテ居
マスガ、鶴ハ今十五ノ小供、婿ハ三十五デア
ルカラ、アマリ年ガ違テ、世間ノ物笑ニモナ
リマスカラ、ドウカ此縁組ハ、取止メタイト
思テ居マス)

『ご言て拒む、サラバ無據とて、叔母は歸
て其由を婿ごのに話す、婿ごのは(チタ
ンダ)踏で悔やしがり、今更斷られては、
世間にも面目なし、この上は代官所に訴

へ出て、是非とも結婚せねはならぬと意氣まき、

あらたまつて、代官出て床几にかゝり、二人の供人従いて座る、やがて呼出に應じて婿ごの出で、代官の前に平伏して結婚の事を訴へる、そこで鶴子嬢の母も呼出され、代官の間に答へて』

母親

たしかに、うーうとぬ、やまとにちるーくゆんで、やくすこーしみしうちやしが、三十五と十五んで、ごごとしぬちがて、かんねるくごー、しきんにんねーらん、たいうまんちぬむぬうれーごなゆらんで、うむやびーくと、ごーでんくぬいんぐみーといやみてんで、うむごーやびん、くりが半分ぬちげーんでごんやいびーれー、またうまーりんしびーしが、

(タシカニ、我夫ノ、山月ニ鶴ヲ呉レルト、約東ハイタシマシタガ、三十五ト十五デ、アマリ年ガ違テ、コンナコトハ、世間ニアリマセン、タダ万人ノ物笑ニナラント、思ハレマヌ

カラ、ドーカ此縁組ハ取ヤメタイト、思テオリマス、之ガ半分ノ違デモアリマシタナラバ、サホドニモ思ヒマセヌガ)

『ご言た言葉尻を、代官は早くも聞きとらへて』

代官

くり、ゆーちぎ、なま、むーくと、半分ぬちげーんでーごんやれー、がってんしんでー、いちやし、すごんちげんねんやー、

(コレ、ヨ一聞ケ、今、婿ト、半分ノ違デアルナラ、承知スルト、言タコトハ、毫モ偽デハナカラウナ)

母親

ウー、がってんやいびーしが、山月や三十五、鶴や十五とやいびーくと、

(ハイ、承知イタシマセウガ、山月ハ三十五、鶴ハ十五デゴザイマスカラ)

代官

ゆたしん、くぬいんぐめー、かにてぬやくすくんやい、またなまう、なぐうやむ、がってんしやる

くごやれー、まじーばいんぐみしむとびちーむんやー

(ヨロシ、此縁組ハ、兼テノ約束デモアリ、又今母親モ、承知シタコトダカラ、正當ニ縁組スベキモノゾ)

『ご殿そかに言渡せば、婿は之を開て雀躍して喜ぶ、母親は呆れ顔に、代官を見上げて』

母親

サリ、なまわーがいんぐみがってんしんで、みせーびたせー、うかんちげーやあいびらんかやー (モシ、今私ハ縁組ヲ承知シタト仰セラレタノハ、御間違デアリマセヌカ)

代官

よーし、うーき、すごんかんちげーやあらん、くり、ゆーかんちげーてんれ、三十五と十五と、なまから五年せー、ちぎなうなゆんでうむゆが、 (ダマレ、少シモ間違デナイ、コレ、ヨク考ヘテ見ヨ、三十五ト十五ト、今カラ五年過ギタラ、幾ツニナルト思フカ)

母親

四十と二十とでーびる (四十ト二十トデゴザイマス)

代官

四十と二十と、半分ぬちげーやあらん、 (四十ト二十トハ、半分違デナイカ)

『母親は茫然として、答ふる辞もなく平伏する、婿ごのは頓狂な聲を揚げて、(四十と二十ハ半分)、と幾度も繰返して、頻に代官に御辞儀をする、之で皆々引込む、いよく嫁入となつて、頭から(カツギ)を被つた花嫁が迎へられて来る、やがて祝宴も済んで一旦静になる、婿ごのは、異様な顔をして出て来り、腕をくみ首を傾けて頻りに何か考へながら』

婿ごの

みーゆみぬ鶴や) ちーしんちウはぢらん、ごーてーやまきまのい、ふーのねーごーぬみーのい、ごーふしぢなむのー (花嫁ノ鶴子嬢ハ、ドーシテモ(かつぎ)ヲ脱ガ

又、身体ハ大キイ、脚ニ毛ガ生テオル、ヨホ
不思議ダ)

『なご、獨語して、再び代官所に訴へ出
る、代官は部下を遣て検査する、花嫁
は、實は鶴子嬢でなく、嬢の家の下男が
主人の命によつて、替玉として来たこ
とが発覺する、そこで母親と鶴子嬢と下
男とは、代官の前に呼出されて、嚴しく
叱られる、これでをしまい』

(二) 組 踊

組踊の起原は、享保年間尚敬王の代に在て、清國冊封使
徐葆光は其著中山傳信錄に此事を記してをる、當時組
踊の作者は玉城親方朝薫といふ人で、其作五番、今に
之を五組と稱して組踊の基礎としてをる、即ち其一は
、二童敵討又は鶴龜復讐といつて、琉球中山の忠臣毛
國鼎護佐丸の遺孤が、父の仇阿摩和利を討取たことを
叙し、其二は、執心鐘入又は鐘魔といつて、一女子が
中城若松といふ少年に戀して魔となつたことを述べ

たもので、道成寺の擬作である、其三は、女物狂又は
人盜といつて、梅若と高野物狂との焼直である、其
四は、銘苅子といつて、琉球の羽衣物語である、其五
は、孝行の巻である、概して本土の諸曲に摸したも
のであるが、爾來組踊を作るもの陸續として出で、今
日では其種類殆んど百を以て數ふべきである、就中、
傑作として聞へてをるのは、平敷屋朝敏の作なる「手
水の縁」一名「波平山」で、波平大主の一子山戸といふ
青年と、知念山口森小屋の一女玉松との戀愛を寫した
もの、與那原良矩の作なる「花賣の縁」一名「森川の子」
といふのは、森川子といふ一士が、故あつて身を花賣
に貶し、深く田舎に隠遁せるを、妻子は遙々首里から
尋ね來て邂逅することを描いたもの、其他「義臣物語」
一名「國吉比屋」は、南部落城後に高嶺按司の遺孤を奉
じて恢復を圖り、單身首里城を燒崩さんとして捕へら
れ、鯨川按司は深く其忠烈を嘆美して、高嶺若按司に
地を與へ家を起さしむるに至ることを叙し、「天願の
若按司」、「二山和睦」なども、可なりの作で共に皆多
少の事實譚である、茲に「波平山」を紹介す、用語は凡
て、今の雅語である、

○ 手水の縁、一名、波平山

第一段

歌

はるなぬんやまゆいぬはなごかい、いちゅしぶる
すぢぬにうぬしらす

(春ヤ野モ山モ百合ノ花盛リ、行キ沿ヒ觸ル、
袖ノ匂ノシホラシサ)

『樂屋カラ此歌ヲ(ンデハ)節ノ蛇皮線ニ合セ
テ優ニ謠ヒ出セハ、若衆姿ノ山戸ハ、日傘
ヲ携へ、歌ニツレテ静々ト舞台ニ現ハレ、
ヨキ所ニ立留リテ』

山戸

わんやしまじいぬはんぢうふぬしぬちゅいぐや
まごよ、ちうやかみしむんあしぶさんがちぬみ
ちゅ、うすかじんしださしながやまぬぶて、はな
がめしらはなごやいあしは

(我ハ島尻ノ波平大主ノ一子山戸ヨ、今日ハ上
モ下モ遊ブ三月ノ三日、軟風モ涼シケレバ砂
川山ニ登テ、花ヲ詠メ花ヲ探テ遊バン)
『歩ミ出シ景色ナガムル狀ニテ、ヨキホドノ

所ニ至リ』

山戸

せけにごゆまへるしながやまんれば、はなやち
ぢゅのうにうむしらす、くまんあしゆつてなが
めぶさぬ

(世ニ名高キ砂川山ヲ見レバ、花ハ咲テ美シク
匂モ亦シホラシ、此所ニ足ヲ留メテ詠メタイ
モノ)

歌

わかなつがなればくさるうかきへてはんぢうたま
がわにかしらはらな

(若夏ニナルバ心浮サレテ、波平玉川ニ頭洗ハ
ン)
『ト(ンデハ)節ニテ樂屋ヨリ聞ユル、此歌ニ
ツレテ、娘姿ノ玉松ハ小柄杓ヲ携エ静々ト踊
リナガラ舞台ノヨキ所ニ現ハレ出テ立留マリ
テ』

玉松

なまんぢるわんやちんやまぐちぬ、むいぐやぬ

ちいぐつたまちちちやよる。さんがちがなへば
くくるうかき入て、はんぢたまがわにかしらあら
な

(今出ル我ハ知念山口ノ、森小屋ノ一子玉松デ
ゴザル、三月ニナレバ心浮サレテ、波平玉川
ニ頭洗ハナ)

歌

はんぢたまがわぬながりゆるみじにしたくと
かしらあらてむごら

(波平玉川ノ流レオル水ニ涼々ト頭ヲ洗テ戻ラ
ン)

『ト又モ(ハヤチクタン)節ノ歌ニツレテ玉
松ハシトヤカニ髪ヲ洗フ様子ヲシテ踊リ
ナガラ歸リカケル』

山戸

はなむながめたい、いすぢむごら

(花モ詠メタリ、急ギ戻ラン)

『ト此方ノ山戸ハ立上リ少シ歩ミ出シテ不
圖玉松ヲ見ソメ近ヅキテ言葉ヲカケ』

山戸

(昔ハ手ニ掬ンダ情カラ出テ、今ニ流レ居ル許
田ノ手水)

『コレハ許田川ニ水ヲ掬ヒテ男女ノ情ヲ通シタ
故事ヲ述ヘテ、玉松ニ情ヲ寄スルナリ』

玉松

みじしらすさごめ、てみじですしらん、あてなし
よでむぬゆるちだほり

(見モ知ラヌ郎君ニ、手水ナド上ゲルコト存ジ
マセヌ、何モ分リマセンカラ御免ナサレ)
『ト玉松ハ又モ行キカケル』

山戸

ちゆでんしくだてくさごゑんむしぶ、んじョてみ
じぬまんむごていかゆへか、とてんくぬかわにわ
みやしらら

(露デスラ降りテ草ト縁結ブモノオ、嬢ノ手水
ヲ呑マズニ戻リ行カンヨリモ、迎モノコトニ
此川ニ我身ヲ捨テン)

『情迫リタルサマニ早言ニ述ベテ川ニ身ヲ捨
テヨウトスル』

玉松

ヤーをみんじョよ、あまいみじぶるぬやしまん
あむぬ、んじョよをなさけにぬまらたばれ

(ヤー戀シキ嬢ヨ、アマリ水ガ欲シクテ堪エラ
レマセヌカラ、嬢ヨ御情ニ呑マセ給ハレ)

『玉松ハフリ戻リ、無言デ柄杓ニ水ヲ汲ミ
山戸ニ差出ス』

山戸

ふいしくからたべるなさげどんやらば、とてんぬ
みぶさやんじョがてみじ

(柄杓カラ給ハルホドノ情アルナラバ、迎モノ
コトニ嬢ノ手水ヲ呑ミタシ)

玉松

みじぶるやなごさたふふりごやよる、よすぬみ
ぬしぢさいすぢいちゅん

(水ガ欲シイナドニカコツケテ戯ナサルカ、人
目繁シイカラ急ギ行キマス)

『ト玉松ハ歸リ行カケル』

山戸

んかしてにくたるなさけからんぢて、なまになが
りゆるちだぬてみじ

ぬちしちるふごぬくとよまたやらば、やぐさみよ
あてごてみじあげら

(命捨ルホドノコトナラバ、耻カシナガラ手水
ヲ上ゲマセツ)

『ト玉松ハ慌テ、山戸ヲ抱キ止メ、フリナク
茲ニ手掌ニ水ヲ掬ヒテ山戸ニ呑マセル』

山戸

アトト、くぬかわにたよてみじぬむくとや
てんぬをたしけか、かみぬふいぢわしか、んじ
ョやをこにち、うゆぶちんやまぐちぬ、むいぐ
やぬなしぐつたまちちちやよら、やみぬよぬからし
なかんむぬしよめ、いわばち、たぼりかじならん
わんや、はんぢやうふぬしぬなしぐつやまごよ、ん
じョがなよかたりしめいやごちかち、よすぬみを
かくちまたんをがま

(アト難有シ、此川ノタメニ手水ヲ呑ムハ、天
ノ御助カ神ノ引合カ、嬢ハ音ニ聞及ブ知念山
口ノ森小屋ノ息女玉松ニテアラン、暗夜ノ鴉
ハ鳴カ子バ知ラレヌ、モーシ聞キタマヘ數ナ
ラヌ我身ハ、波平大主ノ息子山戸デスヨ、嬢ノ

名ヲ語ラレヨ住所ヲモ聞カセラレヨ、人目隠
レテ又モ會ヒマセウカラ)

玉松
ふ、まじやあはねみじしらするめ、うちよで
ししらんこいぬんちしらん、あてなしよでぬゆ
るちたぼり

(人違テアリマセヌカ見モ知モセヌ郎君ヨ、浮
世テサエ知ラヌモノ戀ノ路ナドハ知リマセン
、何モ存ジマセンカラ御免下サレ)

山戸
アケヨ、じよならんくとよまたやらば、にうや
でんすじにうつちたぼり、をむかぢやしでぬみや
ぢぢら

(ハテサテ、儘ナラヌコトモアリマヌナラバ、
セメテ匂デモ我袖ニ移シテ給ハレ、御姿ノ俣
ヲ死出ノミヤゲニシマセウカラ)

玉松
かくちかくさらん、またあはわへて、めせるぐ
とわんやちんやまじやぬ、むじぐやぬなしぐ
たまらぬやする、をがみぶるあてんぬ、まじ

うちに、ちぼであるはなぬそとにゑだんぢぢち、
はなさちよるくとむあいがさびら

(隠ソウトスレバ又現ハレテ、仰ノ如ク我身ハ
、知念山口ノ森小屋ノ女玉松デゴザイマス、
御會マウシタクモ七重ノ籬内ニ荅デ居ル花ガ
、ドウシテ外ニ枝ヲ出シテ花咲クコトモアリ
マスカシラン)

山戸
ヤーをみんじよ、いかなてんぢくぬうにたちぬ
うじうむ、こいぬんちやればあけごしゆる

(ヤー戀シキ嬢ヨ、如何ナル天竺ノ鬼ガ立番シ
テ居ル御門モ、戀ノ路ナレバ開ケマスルヨ)

玉松
ヤーをみささよ、くぬかわぬなれやふいごしぢぢ
あむぬ、いすぢたちむとてまたんをかま
(ヤー戀シキ郎君ヨ、此川ハ人目多イ習テスカ
ラ、急ギ立戻テ又ノ時ニ會マセウ)

山戸
わかりよるすぢに、にううつちたぼり、にうぬ
あるうたやぢぢにさびら

(別ル、袖ニ匂ヲ移シ給ハレヨ、匂ノアル間ハ
伽ニシマセウカラ)

玉松
あさゆみにかけるなりすみぬくそぢ、めぐりあふ
うたぬぢぢにみそれ

(朝夕身ニ掛ケル馴染ノ小袖、メグリ會フ間ノ
伽ニナサレマセ)

山戸
やくすくよたげていちわりよするな、ちうやた
ちむとてまたんをかま

(約束ヲ違エテ偽ナサルナヨ、今日ハ立戻テ又
御目ニカ、リマセウ)

『此時ニ玉松ノ赤染手巾ト山戸ノ日傘トヲ
互ニ取り替ハシ、山戸ハ手巾ヲ肩ニカケ
玉松ハ傘ヲサシテ、兩人双方ニ思ヲ殘シ
振り歸リ見ナガラ静々ト(チュンジュン)節
ノ歌ニツレテ舞台ノ左右ニ立別レル』

歌
わかれてんたげにぐるんあてからやいとにぬくは
なぬちりてぬちぬめ

(別レテモ互ニ御縁アツタナラバ糸ニ貫ク花ノ
散シ去ルモノカ)

○ 第二段

歌
しぬでいくくくるよすやしらねぢぢすぢしかほか
くすくいぬなれや

(忍テ行ク心ヨソヤ知ラテドモ袖デ顔カクス戀
ノ習ヤ)

『ト云フ(ンデハキン)節ノ歌ニツレテ、山
戸ハ編笠ヲ冠リ短刀ヲ脇挟ミ日傘ヲ携サ
へ、忍姿テ舞台ノ一方ニ現ハレ出テ』

山戸
てみじしなるなさけをむいありかみ、いつわい
ぬにうたぢぢがしんち、くいにふみまゆてくがれ
しぬくそや、んかしむぬがたいよすぬうぢぢぢ
よる、いとやなぢぢだにさくらはなさかち、うめ
ぬにうたつるんじぢがをなさけぬ、はんじぢがわ
てみぢむねにぬみしみて、やみぬよるひるむねむ

るよむねらん、といとむるとむになきあかちをれは、あさゆわがすぢやなみしちやぬふいしか、かわくまやねさめぬれるしんち

(手水シタ情ハ思アリ鏡、偽ノ句立ガ心配、戀ニ陥迷テコガレ死ヌコトヤ、昔物語ニ他人ノ上トゾ聞キオル、糸柳枝ニ櫻花ヲ咲カセ、梅ノ句立ツル嬢ガ御情ノ、波平川手水ヲ胸ニ吞シミテ、暗ノ夜晝モ眠ル夜モナシ、鳥トモロ共ニ鳴アカシオレバ、朝夕我袖ヤ波下ノ干瀬カ、乾ク間ヤ無シ、ヌレル心配)

歌

ぬやまくゆるんちやいふふさみてんやみにたふふいといしぬでいぢん

(野山越ユル路ヤ幾里隔ツトモ暗ニ只獨リ忍ビ行カン)

『トイフ(ミチユキ)節ノ歌ニツレテ、山戸ハ歩ミ出シ、舞台ノ奥ニ優カシク聞ユル琴ノ音ヲ便リニ忍ビ寄り、自ラ腰ノ横笛ヲ吹キスサミテヨソナガヲ琴ノ曲ニ合セ、此時ニ奥ノ琴ノ音ハタト止ム』

山戸

やみぬよぬふいとむねしまいてうれば、をぢにんぢみそれをがみぶさぬ

(暗ノ夜ノ人モ寢静マリテオレバ、御門ニ出ナサレ御會シタシ)

『ヤガテ奥ヨリ、琴爪ヲ指ニ箝メタ玉松、ツト走り出テ、舞台ノ一方ニ立留マリ、思詰メタサマニテ、ソレトナク周圍ヲ見マワス、此時ニ人ノ足音ヲ聞タ山戸ハ、用意ノ短刀ヲ拔放シ片膝立テ、身カマエ、之ハ忍ノ法ニテ、イザ露見トイフ時ノ覺悟ナリ。』

玉松

やみぬよにふいぢいごめてめるくゝる、かにてしるわんやをまちぐれしや

(暗ノ夜ニ一人尋テテ參ラル、心、カテテ知ル我身ヤ御待苦シヤ)

『トイフハ正シク玉松ノ聲ト知リテ、山戸ハ刀ヲ收メ笠ヲ脱ギ走り寄りテ、玉松ノ肩ニ輕ク手ヲカケル』

山戸

ヤー、んみんじよよ、をむかぢぬにうゑたちまさいまさて、くらさらんあてごごめてちゝる

(ヤー戀シキ嬢ヨ、俯ノ句立マサリマサリテ、堪エラレンノデ、尋ネ參リマシタ)

玉松

ヤーんみさごよ、くまやふいごしゝさうちにいりみそれ、あわれくぬうゑたぬうむいかたら

(ヤー戀シキ郎君ヨ、此所ハ人目多ケレバ、内ニ入ナサレ、アワレ此間ノ情思語ラバヤ)

『シバラク兩人ハ舞台ニ坐リ、肩ニ手ヲカケ合ヒテ、アイノ傘ノ中ニ懐シサアマル風情ヲナス、ヤガテ立上リ手ニ手ヲ取リテ』

歌

たげにくぬうゑたぬをむいかたら

(互ニ此頃ノ情思ヲ語ラバヤ) 『トイフ(チユンジン)節ニツレテ奥ニ入ル、此間ハ樂屋ニテ』

むすであるちりくぬよまでをもて、かわるなよたげにあぬよまでん

(結デアル契ハ此世マデトモ、替ルナヨ互ニ彼世マデモ)

『ト(シクイ)節ニテ靜ニ歌フ、始ラクシテ山戸ハ、慌シク走出テ、續イテ夜番ノ男モ出テ來ル』

夜番

たるか、よふかさにごぬちふみいよし、なぬよりはなぬれ、ちりくるちしちら

(誰カ、深夜ニ殿内フミ入りナドスルハ、名乗リ得バ名乗レ、斬リ殺シ捨テン)

『ト夜番ハ荒々シク大音ニドナル、山戸ハ振り向キ、屹トナリ刀ニ手ヲカケテ』

山戸

あたらはらたちにあわてるなをごこ、はなぬうゑぬはべるちりぬなよめ、やみにたごふぢいしぬでくるばかい、なさし、よめばんてくるあるわんぬ、かゝよらはか、れちりくるちしちら

(アタラ腹立ニ慌テナル男、花ノ上ノ胡蝶ハ禁

歌

さうわがなかなぬしぬびあらわりて、にまたじ
よならんしでがやまんちに、さめふりすてい
ちなるすわでぬ、くいぬうじがみぬまくとぶん
やらば、たまこがねさごにしらちたほれ

(郎ト我トノ忍事露ハレテ、ドーニモ儘ナラズ
ニ死出ノ山路ニ、郎君ヲ振捨テ、行ク最後ナ
レバ、戀ノ氏神ガ誠ダニアラセラルナラ、戀
シ懐カシノ郎君ニ知ラシテ給ハレ)

『此時、舞臺ノ一方ニ、山戸ハ憂ニヤツレ
夕姿ニテ、次ノ(シテシヤク)節ニツレテ
現ハレ出ル』

歌

アケヨ、たまちやくるさりて、やい、とめてむ
るこむにならんしむぬ

(嗚呼、玉松ハ殺サレントヤ、尋テテ諸共ニナ
ランモノオ)

山戸

あわり、たまちやくるさりて、やい、とめてむ
まんばてくるさりて、やい、よすつびぬむとてな

『西掟ハ立チテ、玉松ヲ舞臺ノ中央ニ坐ラ
セル』

玉松

ヤー、しちやぬをふやくやまぐちぬにしんち、くぬ
よふりすてく、いちちるちわでぬ、はじむふりす
て、いはち、たばり、いきよりばくるさしなば
わすれよい、かたごちんあぬよいすぢぶさあしが
、またんくぬせけやをがまんやれば、あまりを
むくとぬつくさらんあしや、しぬるわがいぬちつ
ゆふぶんをまん、さごに、くばぬちにか、てを
むぬ、ヤー、しちやぬをふやく、ヤー、にしんち
よ、さごやはなさかい、ふ、ちまさいやれば、をし
がなしみやだよりよるひるむみそち、てんぬをさ
だぬくだてくるしつや、しでがやまんちにをま
ちさびらてやい、たまこがねさごにかたてたほれ
、むしかわがいぐんそむちめるやらば、まくとあ
ぬせけぬくぬよごあれば、んちてささいきめみ
らんはずでむぬ、くまくまごむねにしてみてたほれ
(ヤー志喜屋ノ大役山口ノ西掟、此世フリ捨テ
、行ク際ダモノ、耻モフリ捨テ、言ハントコト

まごわち、さる、むじよさるちだて、しけにゐてぬ
すか、とめてむるこむにならんしむぬ、さな
かやよらくるさりかしちら、ちむいすぢあよでい
ちめをがま

(アフレ玉松ヤ他見ヲ憚カリテ、知念濱ニ出テ
殺サレントヤ、他人ノ告アッテ今ゾ我ハ聞ケ
リ、嬢ヲ先クテ、此世界ニ居テ何カセン、
尋テテ諸共ニナランモノオ、途中カヤラ殺サ
レヤシツラン、心急ギ歩ミテ生前ニ一會ハ
ン)

『此方ニテハ大役ト玉松ト西掟トハ、歩ミ
出シテ舞臺ノ一方ニ坐ヲ占メル』

大役

ちになんばまち、やん、よかごくるいらで、よすめ
ねんうちにいすぢすまし

(知念濱ニ着イタ、ヨキ所撰ンテ人目ナキ内ニ
急ギ濟マサン)

西掟

をがんち、みやびて
(カシヨマリマシタ)

聞キ給ハレヨ、生き居レバコソ苦シケレ死ナ
バ忘ラレン、片時モ彼世ニ急ギタケド、又モ
此世界ガ見ラレヌコトナレバ、アマリ思コト
多クテ盡サレヌ、死ヌル我命ハ露ホドモ思ハ
ヌガ、郎君ニ傳エル言ノ氣ニカ、リアルモノ
オ、ヤー志喜屋ノ大役、ヤー西掟ヨ、郎君ハ
花盛リ人ニ勝レテ居ラルレバ、御主様御奉公
夜晝モナサレテ、天命ノ下リ來タ時ニハ、死
出ノ山路ニ御待申シマスルト、戀シキ郎君ニ
語テ給ハレヨ、若シモ我遺言背キナサルナラ
バ、眞ニ彼世ハ此世ノ如クアラバ、出テ、郎
君ニ會ヒ見ヌツモリト、委細ニ郎君ノ胸ニ傳
エテ給ハレ)

大役

めせるいくとばやさごちむにふかく、よすぐとや
はかてかたるはづでむぬ、くぬくとやうひむをき
づけよめすな

(仰シヤル言ハ郎君ノ胸ニ深ク、人目ヲ避ケテ
語ルツモリテ御坐リマスレバ此コトヤ毫モ御
氣遣召スナ)

大役

『下言終リ、大役ハ涙拂ヒテ西掟ニ向ヒ』

ヤーにしんち、ごちうつちすまんいすぢすませ

(ヤー西掟、時刻移リテハ相濟マヌ、急ギスマセ)

西掟

をがんちびやびち

『西掟ハ立カ、リ、玉松ノ後ニマワリ、大
刀ヲ抜キ放シ身構シテ、片手ニ玉松ノ髪
ノ毛ヲ押シノケ、斬ラントシテハ躊躇シ
テ』

西掟

ハー、あさゆむいすだてしたるわがをみぐッ、ま
くごちかたなにちゆるしぬばらん、たんでをふ
やくちばてたばれ

(ハー、朝夕守リ育テシ我ガ御子、マコト一刀
ニ斬ルニ忍ビヌ、ドーゾ大役氣張テ給ハレ)

大役

ハー、をうせごちやればごちうつしすまん、かた
ごちんはやくいそび〜

(吁乎、如何ニシヤウヤ)

西掟

イヤ、かたなはにさわるむんやぬんやるむぬか
(イヤ、刀ノ邪魔スル者ハ何モノカ)

山戸

あわれ、しりみそれいへばち、たばれ、かすなら
んわんやはんぢやをぬしぬなしぐやまごよ、あ
まいむいぐや、ぢりだてぬまきさ、いかなてんぢ
くぬをにたちぬうぢも、こいぬんぢやればあけ
ごすよる、ヤーしぢやぬをふやくやまぐちぬにし
んち、ぢりむごちわりむき、たて、たばれ、んか
しむぬかたいむ、つたへち、ん、こいしぬぶくと
やせけにあるなれい、むごうさよみそちかなし
よみそち、せけんさいさたぬさいとまるうぢや、
む、かくしかくちしらんくごしぢぬ、たまぢが
いぬちわんにくれてたばれ、たんでじよならんく
ごよまたやらば、わんむもるとむにくるちたばれ

(アワレ知リ召サレヨ言エバ聞キ給ハレヨ、數ナ
ラヌ我ハ波平大主ノ一子山戸ヨ、アマリ森小
屋ヤ義理立ノ堅サヨ、如何ナ天竺ノ鬼立ノ御

(ハー、主命デアレバ時刻移ツテスマヌ、片時
モ早ク急ゲ〜)

歌

アケヨ、もりそたてしちやるわがをみぐッ、ぎり
やいもんもみしなしヨカ

(吁乎、守リ育テシタル我ガ御子義理デアルト
言タトテ何トシテ)

『トイフ樂屋カラナル(アガリエ)節ノ歌ノ
中ニ、西掟ハ幾度モ刀フリ上ゲテハ斬リ
兼テ居ル、所ニ山戸ハ走り寄り、白刃
ノ下ニ身ヲ投ゲテ玉松ヲカバイ』

山戸

ヤーうみんじよ

玉松
(ヤー戀シキ嬢ヨ)

ヤーうみさごよ
(ヤー戀シキ郎君ヨ)

歌

『次ノ(アガリエ)節ノ歌ハ此時又モ聞ユル』
アケヨ、いちがしよらら

門モ、戀ノ道ナレハ開ケルモノオ、ヤー志喜
屋ノ大役山口ノ西掟、義理モ理由モ聞立テ、
給ハレ、昔物語幾ラモ聞ク、戀忍ブコトヤ世
間ニアル習、憐レト思召テ愛ラント思召テ、
世間取沙汰ノ止ム間ハ、只管ニ隠シテ知レン
ヨウニスルカラ、玉松ノ命ハ我ニ呉レテ給ハ
レ、タツテ叶ハヌコトモアラバ、我モ諸共ニ殺
シ給ハレ)

大役

ヤーにしんち、をみつけるくごぬわんにまたあよ
ん、こいしくぬせけにあるむぬごやよる、ふいぢ
ぬくちしぢやむごちぬまごやよる、せけんさいさた
ぬさいとまるうぢや、またまぢがくごやまやま
ごにわたし、くるちぢびたんでやいにんぢにけ
てをいて、あご〜にならばをすむごいなをち、
またよにんぢぢはなさかちしらに、たまぬいと
ぐるんしよぬでもぬ、わんぬいへるぐごなれてた
ばれ

(ヤー西掟ヨ、思ツケルコトコソ我ニアレ、戀
ハ此世界ニ在ルモノゾ、人ノ口舌モ時ノ間ゾ

ヨ、世間取沙汰ノ取止マル間ハ、眞玉松ノコトハ眞山戸ニ渡シ、殺シテ参リマシタト申上テオイテ、後々ニナラバ御機嫌取直シテ、又世ニ出シマイラセテ花ヲ咲カセ、玉ノ御縁ヲ結ハセンモノオ、我ノ言エル如クニ同意シテ給ハレヨ)

西掟

めせるぐと、あごくにならばをちむこいなうち、たまぬいごるんむすびぶさぬ

(仰ノ如ク、後々ニナラバ御機嫌取直シテ、玉ノ糸ノ御縁ヲ結ビタウゴザル)

『ソコデ西掟ハ刀ヲ收メテ大役ノ次ニ居直ル』

大役

ヤー、まやまご、んれはちむぐるしむぞうさやをみぐ、まぐごちかたなにもちむぬしぬばらん、またまぢがいぬちわたすはづでもぬ、いすぢひちつれてしぬでいもれ

(ヤー眞山戸、見レハ心苦シサ憐レサ御嬢、マコト一刀ニ斬ル心ニ忍ビヌ、眞玉松ノ命ヲ渡

シマスカラ、急ギ引連レテ忍デ参ラレヨ)

山戸

アトト、たごくるぬかぢにたいがぬちしくて、くぬぐらんぢやいぢしうくりやびか、をむくごやあまたかたらいふさあしが、やがてよやあちるよすしれてすまん、ぐらんをなさけやあごにをくりやびら

(アト忝ナシ、御雨所ノ御蔭ニ二人ノ命救ハレテ、此御恩義ヤ如何シテ送リマセウカ、思コト數多語リタクアレド、ヤガテ夜モ明ルカラ他人ニ知レテハ濟マヌ、御恩御情ハ後ニ送リマセウ)

大役

やーをみぐ、ヤーまやまご、いみふごんよすにあられてからや、わたみぬうにでいじあらんすむぬ、よふかざるうちにいすじいもれ、トトト、いすじいもれ

(ヤー御嬢、ヤー眞山戸、夢ホドモ他ニ露ハレタナラバ、我等身上ノ大事デアリマスカラシテ、夜深キ内ニ急ギ参ラレヨ、サーく急ギ

参ラレヨ)

山戸

ヤーをみんじよよ、んじよわがなかぬしぬびあらわれて、ふいぢみまごわけてくるされんてやい、よすつげぬあごてめてちよる、をむくとやかなていきめいぢる、つれていくとやいみかやよら

(ヤー戀シキ嬢ヨ、嬢ト我トノ忍アラハレテ、人目憚リテ殺サレント、他ノ告アツテ尋テ来マシタ、思コト叶テ生前ニ會ヒ、連レテ行クコトヤ夢カシラン)

玉松

ヤーをみささよ、わんむをむくとんいわんつくさらむ、といむなちしみてよむやがてあちる、よふかざるうちにいすぢちむごら

(ヤー戀シキ郎君ヨ、我身モ思事モ言ツクサレマセヌ、烏モ鳴キ初メテ夜モヤガテ明ケマヌルカラ、夜深キ内ニ急ギ立戻リマセウ)

歌

といむなちしみてやがてよやあちる、よふかざるうちにいすぢちむごら

和文及和歌

第六章 和文及和歌

るうちにいすぢちむごら

『トイフ(アガリエ)節ノ歌ニツレテ山戸ト

玉松トハ一方ニ大役ト西掟トハ他方ニ引込ム、之ニテドンくニナリ、オシマイ』

琉球人にして和文と和歌とに堪能なるものを挙げよといは、何人も先づ指を平敷屋朝敏に屈することに躊躇せぬであらう、朝敏は享保年間なる尙敬王の琉球黄金時代に出で、當時の執政蔡温に反抗して安謝湊に斬首せられた人であるが、其富麗なる詞藻は其數奇なる境遇と相待て後世に喧傳せられてをる、其遺稿として、貧家記、苦の下、万歳、若州、等は僅に今に存す、又、近代の歌人としては、宜野灣親方朝保を推さざるを得ない、朝保は琉球の名族で、職を外國御用係等に奉じ、安政年間以來支那に使すること二度、本土に赴くこと六度、薩州に於て歌人八田知紀等に交を結ぶることである、明治五年慶賀副使として東京に來り、吹上離宮の御歌會に陪し、御兼題當坐を詠進して

殺威を蒙る、水石契久、紅葉如醉、の二首之である、
(クドキ)節の「上リ口説」、「下リ口説」及「四季口説」も
亦朝保の作と傳へられてをる、當時中山王を改て藩王
となすの事あるや、琉球が速に朝命を遵奉したのは朝
保の力與つて大なるものであつたが、其後支那進貢を
絶つへき等數箇條の令あるに及び、物議頗る沸騰す、
此際に朝保は終に要職を退き、悟性亭を結びて閑居し
、明治九年五十四歳にして没す、和歌數百首、詩數篇
、上京日記、等の遺稿今に存す、鄭嘉訓としては、其
書、畫、共に世に愛重せられてをる

(一) 昔之下 平敷屋朝敏

今は昔、何某の按司とかやきこゑ給ふいまそかりけ
り、仲島のあたりに忍ひてたわしかよふ所ありけり
、よしや君といふうかれめかれになん有ける、其遊
女岡谷にかゝやくはかりにて、心はへも優になつか
しく、かいよみひきしらふるふしくもすくれにた
れば、世の中ゆすりてめてはやし、契を結ふたほか
りけり、中にもこの按司ことにかふものして、女
もこよならなんたもいたてまつりける、いかなるつ

いてにかこらんしそめ、いかなるをりにかたわしそ
めけむ、そのほこのことはききもたかねはかす、扱
八月十五夜もろ共に那覇の入江の月見し給ふに、御
舟のよそいもことくしからす忍ひてなりけり、む
つましうたはしける御隨身ふたり、酌さるわらわの
たかしけなるひとり、梶さるたのこふたりはかりな
ん有ける、雲晴空すみて万里の外まで照渡れるいは
んかたなし、るりのやうなる水の上よりさし渡るな
ごこの世もたはへす、あふの松山はるかにみゑて
紫雲寺の法の鐘幽にきこゆ、渡地の浦には遊女も
のうたい遊ふも哀にたもほす、波のまに／＼なけれ
ゆくに、これなん住吉のきしと申せは、さしごめさ
せてこらんするに、松の生さま岩ほのたすまひな
ごもたならぬに、非かきのわたりかうくしう物
さひて、しらゆふの月になひくもたかしう見ゆ、松
を秋風吹音にこゑうちそふる浦波も哀にひききて、
月の光も所からこなる、按司
たもふごち夜舟こきよてすみよしのうらめつらし
き月を見るかな
よしや君

今宵みる月のあわれにすみよしのきしかた行へた

もひのこさて

御隨身しけはるにさかつきをたまはりて

またもこむ秋の今宵はいさしらす

ごのたまへは

さためなきよのうらめしきかな

さてうちなきければ、按司もしほたりたはず、ひと

りの御隨身

なれし鹽路の梶まくらうきねそかはるこの海は

ごたからかにうたひたるいとわかし、よしや君

今宵一輪みてり清光いつれの所になからん

といふことを、かれふひんかの聲にて朗詠したるい

はんかたなくたもしろし、更行まゝにいこ、面白さ

まさりて、一刻千金にもかうましき夜のさまなり、

かくて遊び給ふに、秋の夜のながきもほごなく明ゆ

けはかへらせ給ひぬ

その後渡りたはして、つごめて出かてにやすらひ給

ふほど、前裁の千種みたれあひて、霧立わたる朝は

らけの庭、艶にわかしきに、女のねたれの姿いと、

うつくしうなまめいたり

朝霧のたち出かたくやすらへはいごゝいろそ

やこの秋萩

いかせんて手をどらへてうちまもりたまへは、

はつかしけにかいそむきて

なをふかく立そへ色もなき花のたもかくしせん

今朝のあさきり

といふあてにろうたし

またのとし梅の花さかりに、さはるごもものして渡

り給はさりければ、よみてたてまつりける

色も香もかいなきものはうくひすの音信もこぬ

やこの梅か枝

御返し

匂ふてふ軒端のむめの花の枝にかよふごゝろの

色はみさるや

常に御消息のたゆることなし、たゆればこれより聞

へてかたみにいとふかし、されとあまたの人に契を

わくる身にて、思ふようにあひたてまつることなら

て、心つくしなることのみたはかる、ある時黒雲と

のといふ人にさそはれて、佐敷といふ所へまかりて

、そこにみそかはかりと、まりぬ、そのほど御消息も

うけたまはらて、心もなふ戀しきことかきりなし
さてたもふあたりは二三里ばかりもへたつらんか
しなど、人しれすたもひて

空かけるつはさもかなやとまの間にたもふその
人みてもくるへく

かへりくる道にてすて舟を見て

よるへなくうきて世渡るみつからや波にたよ
ふ海士のすてふね

按司もいかにまぢとふにたほしけんかし、其夜やか
て御消息たてまつりければ、いそぎ渡りたはしつ、
めつらしきにもいと、御思はまきりけんかし

あら玉のとしのちとせもふるはかりまぢ遠なり
し君にもあるかな
あるし

はつかしやひなにこしへていかはかりうごろへ
にたるすかたなるらん

扱このほごのこもきへいて、かたみになき給
ふほどに鳥も啼ぬ

またいつのちきりもしらぬ手枕になにいそくら
んごりの初

、時の間もなし

またその、ち渡りたはして、つとめて例のいてかて
にし給へは、はや歸り給ひぬ、明果は見るしかる
へしなど、そののかしければ、立出給ひけるか、又
かへりたはして、山吹のさかりにたはしけなるを一
枝をらせ給ひて

しはしごもいはぬはつらき色なからまたかへり
みる山吹のはな

たこかましと見給ふらん、はつかしくこそこの給へ
は

行春のなごり露けき山吹はいはぬもふかき色香
とは見む

といひもあへすなみた一目ふきたるふせいは、いと
、見捨かたくてやすらひたはするほどに、明果ぬ、
こはいか、せんと給へは、うち笑ひていか、せん
けふはこもらせ給へ道のほごもはしたなかるへしと
て、奥の間へいさな入れたてまつりつ、日たけぬれ
は、所につけたるあるしなどよそひいて、見たてま
つるもめつらかにたはす、長き春の口にひねもすこ
もりたはして、あひ思ふ中のしつかにうらなくき

あるし

たまさかにあふよの空よ心してしはしなあけそ
とりはなくとも

といひければ、ほごなう明ゆけは例のいてかてにや
すらひ給ふほど、庭の梅に黄鳥の啼ければ、かれ聞
給ひ、うらやましき契にも有かなとて

ねくらしむる春のうくひすたき出てたそふとこ
ろもまたはなのかけ
あるし

やとしめてたきふし花にちきりぬるころの色
、のそれもひとよき

なにこかあたならぬと、なみたくみたるふせいは
いと、見すてかたければ、明はては人目もいかと
ていそぎかへりたはしぬ、道すからつとたもかけそ
ひて、このにたはしても露忘られ給はず、女も名残

戀しくなめたるに、御文あり開きてみれば
わかれつるけるの名残もあらしかしことしけき
人はこにまきれて

たもなの御たしはかりやとて御返し
なをさりの思やものたまさるらんこやわすらる
あるし

ゑかはし給ひけること、もいかにき、所たほかりけ
ん、暮かゝるほど、うしろの庭の松に咲かゝれる藤
の色まさる夕はへをうちななめ給ひて
くりかへしみるもめつらし藤かつら花のあるし
の袖のたくひそ
あるし

まれひとのこ葉の花の色香にはかけてたよは
ぬやとのふちなみ

其夜もごまり給ひぬ、行すへかけていと、哀に淺か
らぬみものかたりに例のほごなう明ゆけはかへり給
ひぬ、かごの本なる櫻の蔭までたくりたてまつりて
、いか、思ひけん御袖をひかへて
まてしはしかはかりもの、かなしきはこれやか
きりの袖のわかれち

とて打なきければ、あかきみまたもこそあはめ、さ
のみたもひないれそなごしらへて歸りたはしつ、
なごりも戀しく哀にて内へもいらす前栽の草木をな
かめありくに、柳の露になひくをうちななめ
ひとかたになひく柳の糸ならは露もこころやた
きとめてまし

いかてかゝる身にしも生れけんぞ、わかすくせそ返すくうらめしき、按司も名残戀しく露わすられ給はねは、其夜もたはさんとし給ふほごに、御母俄になやませ給へはごゝまり給ひぬ、日ころふれごたり給わてれもりのみゆけは、くすりすはらなにやかやごみ心のいとまものさて、をのつから御忍ひありきはたへたるへし、かゝるほごにかの黒雲殿、よしやか母によしや君をたへんごならは、千々の金に色々のたからをそへてたてまつらんごいひければ、母よろこひてかゝる幸こそまたなけれ、さらはいつにてもむかひ給へごいひければ、雲殿よろこひて陰陽師に目をさせければ、來る月の七日よき日なりいひければ、このよしいひたごせける、かういふ月は五月の末つかたになん有ける、よしやこのよしをきゝたごらきて母にいふやう、このわきに身をやつしてより、母の爲にきうけにたる金餘多めれば、それにて豊かによをたくり給ふへきに、なにごて雲殿のかたへ送らんごはし給ふぞ、按司の御情いかはかりごかたほしめす、此世はた、夢なり金のために人のなまけなやふり給ひごいひければ、母いかりて

情ごは何物ぞ、かのたまのをるは忽ち長者の身ごなりて浮世の榮華をきわむへし、汝をそたてしも若かゝるごもやごてなり、わかいふごにしたかわすは只今いつちへもうせねごて、打もころしつへければ、さらはごもかくも仰にごそしたかはめごたへて、それよりひとまなる所にかきごもりて、物くふごをたちにけり、按司この事きごしめし、いと哀に口惜しうたはせご、母君の御なやみは重く、又さらごもにきはひゆたかにたはする御身ならねは、ごりかへし給ふへきちからなく、たゝみ心のうちばかりにたはしくたくなん、よしやは君に別れてなにかせんたゝしなんごそご、いと、物くふごをたちて啼より外のごごなし、鶴君ごてよしやにつかへけるうかれめそはにきて、いかにたはせはかう湯水をたにきごしめさぬぞ、これいさゝかごてかゆなごすゝむれご、更にみもいれす、たゝうつふし伏たり、いかにたはしめすらんごは丸にのたまはせよなごいへご、更にいらへもせねはうちなげきてたぢぬ、母はさまゝの送物ごも所せさまてうけごりゑてよろこぶ事かきりなし、よしやは扱も情なきごのは人の心

なりけり、誠の母にてたはさばはし給はしをご、うせにし母ぞ、いと戀しき、之はまゝはごごいひける、ふしてみかはかりになれば、氣もつかれ身もたもければ、やかてしぬへしごさすかにもの心はそゝ哀なり、夕つかたつるきみをよひ、つま戸を明させて庭をみるに、まつ春は難波芳野を忍ふよすかにうるし梅櫻、升手をうつせる山吹藤つゝし、夏は卵のはなさかりなごしご、昔をしのふ花立はな夕かは、池には法の逆、この生にたごひける萍のよられゆくもあわれなり、秋はさほしかのさまにする萩原、露にみたるゝかるかやをみなへし、萩薄藤はかま、立田姫の心をそめるつたかへて、いまた紅葉はせねごうすくれなごの若みごりもをかし、扱また千代を松竹の枝うちかわすけしきも、けふまでこそはもてあそはめご、心をごめて詠むるに哀れなるごごたほかり、くるれば草むらのほたる飛出て、やり水にうつれるかけもすゝしきなり、このころ露ねられさりけるか、其夜少まごらみたる夢に、ごのにまかりてをかむご見て、名残も戀しければ、ぬればや人のごうちなげきて、いまひとたひみんご、ごごさらごに

まごらめごまごらまれねは
夢にたにいまひとたひはごはかりのねかひもさ
らにかなはしごの身や
其夜按司はほごの御前にて、母君の御爲にきせいし給ひけるに、すのこのもごに人たてり、たごご見むき給へはよしやなり、扱きみはわつらわれぬごきゝ侍るか心地よしやごのたまへは、いらへはせて消へうせぬ、あやしくて人をつかはして有様ごわせ給へは、病重くてねやより外に出てすごなんいひける、又の日もよしやは庭をなかめたるに、ごご地あしごて打倒れけるか、やかてむなしくなりぬ、人々ごかくすれごかひもなし、つるきみ鳴かなしむごご限りなし、母もくゆれごもかひなし、このごごやかてきごゑければ、國の人たしみなげきて、きごむらふたほかりけり、ごしもわつか十九ごなん、あゝたしむへし、花顔忽ち狂風にやふられ、佳月浮雲に光をうしなへるごご、その頃ちまたの歌の、黒雲ごのゝうらめしや、あたら月のかほかくせると、哀になんうたいける、よるもひるもひまなく人まうてゝ、あるはごきやう、あるはねふつし、また詩歌管絃ご

たむくるもあり、そのうたごもに

たもへたれも天津そらなるいなつまのひかりの
うちのあたし世の中

手向ぬるけふりよそてにちる露の玉ゆらみせよ
ありしたもかけ

たもひきやわたつるなみたの露分てかゝる野はら
にたつねこんどは

行へなく消にし人のかたみとてはらわてやみん
そてのしらつゆ

なき玉も哀とやみん手向とてなみたをそゝく花
のひとゑた

哀その消しなこりの露けさやたほよそひとのう
ごきそてまで

もしもそのくるしきなみにたゝよはゝこかねの
きしに南無阿彌陀佛

たもかりしさわりも消てむらさきの雲にさそわ
れにしへこそゆけ

此外あまた有しかごもたほへす、按司はかの身まか
りしよしきこしめし、胸ひしきてあはれにななう
たほさるれど、母君の御臍いと重ければわたり給は

す、秋になりてなん少したこたり給ひければ渡りた

はしける、門をいり給ふよりもの哀なり、前裁もあ

れてすのこそいかいよろつ有しにかわるこゝちす、

つる君出来てまつ打なけく有様きこゆ、かしこへも

のせんにきはまりしより、湯水をたにみにいれすひ

きかつきてなき給ふより外のことなかりき、あす身

まかり給はんとて夕つかた、なつかしけなる氣しき

にて庭をうちななめ、又の日いまはのきはまても庭

をなん詠め給ひき、之はかの手をさひなりやかんと

しられしを、かたみにもとてうはひとり侍りき、御

覽せよとてふどころよりしるきうすやうのふみめく
ものどりいたす、ひらきて見給へはその手にて
わするなよむかしの人となりぬとも袖ふれなれ
し軒のたちはな
なきあごにきてみんひとのたごにも哀はかけ
に萩か枝のつゆ
藤かゑもわすれしなその夕くれにかけしこと葉
のつゆのなきけを
君とはゝかたれいまはのゆふへまてつゆわすれ
すと萩もすゝきも

朝顔の露のいのちをしらすして身を松竹にいはい
こしかな

草の葉に風まつ露のそれよりもわか身やあたにな
まつ消なまし

松竹に万代遠くちきりてもたれ朝顔の露の身な
らむ

弊をたにきかてわかるゝ歎きせむ昔をいまの身
のうへにして

ごふるくはかなきさまにかけるは、よはりての手
なりけりとみ給ふにも、哀のみつさせす

あらさらむあごのかたみと水くきにふかきあわ
れをかきやなかせ

常にすみける所を御覽すれば、ふるき衾ふるき枕ち
りはみて残れる、誰と共にかさうち歎き給ひて

残りても誰とゝもにかゝさねけむふるき衾のう
らめしのよや

暮ぬれど立出かたく悲しくて、そこにねたまひぬ
ちりつもあるふるき枕によりふしてしのふもかな

しありしよの夢
たゝその折の心地して、ごもにね給ふやうにたほさ

れて

たゝこゝに今もそひねとたもふまてたもかけと
まるねやの手まくら

あくれはなくくいて給ひぬ、をりしも庭の千種み
たれあひて、霧立わたる朝ほらけたほしいてられて

、やすらひつゝななめ給ふ
なき人のありしをしへと咲花のたもかくしする
霧もなつかし

尾花のまねくも哀れにたほして
なき人のかへりもやくる花すゝきなをまねき見
よそての秋風

それより暮にまうてゝ見給ふに、かなしきことたく
ひなし、いける人にもいふことく何やらたほくの
たまひて

たつねとふわれをたれとて一ことこのこたへたに
せぬ昔のしたひご

この給へは、暮のうち震動してしはしやます、之に
つけても哀のみまさり給ふ、そのにたわしてもの

ゝみかなしく哀なれば、したひやゆかまし、しらぬ山
路にひとりいかにこゝろのはそゝ哀ならん、なごた

ほしつゝくる折しも、空にその聲にて

あさましや人をたもひの消やらてなをいつまで
か身をこかすらん

といふあたりをみあげ給へは、雲一むら有てなにも
みへすかなしくて

それとさきくこゑもなつかしたなくはすかたを
みせよむら雲のうち

この給へは、有しなからの姿あらわれて、下りき
てなつかしけにみたてまつる、あか君今はいづくに
あるそちかうよりよよどの給へは、いらへもせてさ
めくこなく、密にはせは消うせぬ、又ある寺の和尚
座禪し給ふ夕つかた、窓ちかく若き女のこゑにて

死出の山わかい道は雲くらしか、けててらせ
法のごもし火

といひければ、あやしくて窓をし明てみ給へは人も
なし、哀闇にまよへる人ならんこあはれにたほして
誰ごはしり給はされど、いとねもころに御經よみ
て吊ひけるごなむ

按司このごときこしめし、哀れの人なん、ひとりい
かにまよふらん、いて我行て道しるへせん、待もこ

○幸逢太平代

花にゑい月にうたひて遊ぶこそこの大御代のつと
めなりけれ

○暮春鶯

今はとてふるすに歸るうくひすの聲こそ春のゆく
へなりけれ

○不二を見て

布しのねをふりさけみれば白雲のうへにも雪はつ
もるなりけり

○夕立雲

天つ日のしはし隠れし夕立の雲の高ねはくつれす
もかな

○夏夢

短夜の夢ごしもなくあらましの吾世長くも見えわ
たる哉

○定家卿一字題をひろひとりてよめる四季の長
歌

梓弓春は霞を曳つれて、出て鳴つる鶯の、聲にひ
らけし梅の花、見てもあかねはそのにほひ、袖に
うつして青柳の、いとにひかれて野に山に、うか

そすれど、それより御ものをたちて、たゝそのいそ
きをし給ひけるごそ

『ある人のいはく、よしや君ごときこゑしうかれめ
は、慶安三年庚寅に生れて、寛文八年戊申に身
まかりぬ、在世わつか十九歳の間なるを、其名
高木のほりて、遠き日の本まで聞えしものなれ
は、朝敏かいひけんやうに、かいよみ引しらぶ
るふしくもすぐれにたればと、昔の下にひき
たこしかいつくるもむへなりごそ、歌に、
昔のしたにありともよしや君かため
いまはむかしの水くきのあと』

いまはむかしの水くきのあと』

(二) 短歌及長歌 宜野灣朝保

○水石契久

動きなき御世を心のいはかねにかけてたえせぬ瀧
の白糸

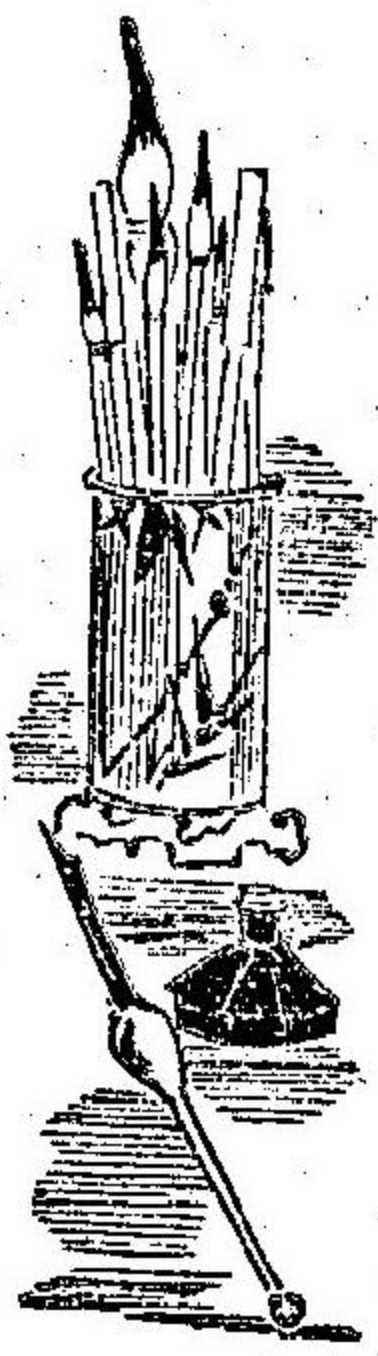
○紅葉如醉

汲かはす圓居の外のみちまて酔の盛と見ゆるけ
ふかな

れ遊はん折をわて、をれる巖に長き日の、くる、
もしらて白雲の、かゝる高嶺の山櫻、咲は又咲桃
の花、も、よろこひの心には、何のつらさも梨の
花、ちらぬ程にと打はふち、雉子うたへはうたひ
つゝ、あかる雲雀の雲井より、歸ると見れば蛙鳴
、川のつゝみのすみれ草、咲も珍らし花むしろ、
いく重かさねてその上に、八重の花咲山吹は、い
はぬ色にていはつゝし、あかき心のゆかりごて、
なひきかゝれる藤の花、春のなこりをたしむまに
、夏のひかけに打むかふ、葵かさして神山に、の
ほりくゝて郭公、初音待ねて歸るさの、空もくも
りてさみたれの、日敷ふりつゝさひしくも、水鶏
鳴なるやみの夜を、月になしたる卵の花の、白き
扇の涼しげに、蓮にはへる池見れば、泉流れて底
清み影をうつしてとふ螢、鳴てもわつゝなく蟬の
、聲のしきりに待わひし、秋をむかへて吹風の、
萩の上葉に音すれば、萩は錦をうち重ね、露けか
りける花薄、まねく袂やにはふらん、雁も來にけ
り鹿も鳴、虫の聲々あわれごて、霧のまかきはた
てたれど、月はくまなくさやかにて、鶉なく野に

うかれ出、きけはほろ／＼とひ立は、鴨の羽音は
 白菊の、花にまさると見し人の、心ふかくもそめ
 出す、葛や紅葉のから錦、きつ、かへりし秋のあ
 と、つきて冬には初時雨、ふりみふらすみたく霜
 のさゆるあしたの薄氷、くたく霞の音そへて、ふ
 るや突もたもしろく、つもり／＼し雪の上、ふめ
 る跡をはをし鴨の、鷹にたはれてかくれゆく、草
 の影より暮そめて、歸る家路の空寒く、袂かつき
 て寐たる夜の、夢をいくたひ驚かす、音はたかは
 寸椎柴の、木の實ましりに落たるも、拾はぬ御世
 は此御世と、鳥の初音に起出て、たのかつとめを
 つとめつ、いとまある日は月花の、影をたつね
 て遊ひつ、かゝる御代こそ嬉しかりけれ、

世中の遊ひ所は月花のかけより外にあらしと
 そ思ふ



琉球の各地方を旅行する人は、山の頂、河の岸、森の
 中、道路の側、などに大げさな碑石の立ちをを見る
 であらう、概して久米村大夫若しくは明清冊封使の手に
 成たもので、堂々と明清の正朔年号を記して、橋梁を
 架設したとか、道路を修繕したとか、堂宇を建てたこ
 か、を書き立て、をる、茲に擧ぐる一は、浦添に在る
 琉球最古の金石文で、首里城門外の「石門のひのもの」
 、那覇港口(ヤラザ)城上の「屋良佐もりのひのもの」、
 と共に純粹の琉球文で書かれてをるのは頗る珍重すべ
 きものである、二は、那覇久米村聖廟構内に在るもの
 で、名護親方、寵文、程順則の撰である
 舊來琉球に於ける法令訓示等は、凡て假名交りの候文
 体で、書法も凡て御家流であつたのである、茲に擧ぐ
 る、(三)「獨物語」は有名なる具志頭親方、文若、蔡温の
 遺書で、全文五十二箇條より成る、今其二箇條を抄録
 す、(四)「御教條」も亦蔡温の名で傳へられてをるが、實
 は蔡温幕下の士豊川親方の手に成たものである、全文
 三十二箇條より成る、今其五箇條を摘記す、

第七章 碑文、候文、及漢詩

久米村は明の洪武永樂年間に移植された岡族三十六姓
 裔孫の住する部落で、古來冊封貢進の時には久米村人
 専ら通譯の任に當り、琉球支那交通の連鎖として琉球
 社會に尊重されてをて、漢文と詩は實に彼等の専有
 であつたが、今日に至ては見るに足るもの一もない、
 茲に擧ぐる、五詩の「東苑八景」は、程順則の作で、首
 里城東の崎山別莊八景を詠したものが、これさへあ
 まり名吟といわれぬ、つまり現今の琉球に於ける漢
 文及詩は其發達程度甚だ低く、其流行區域も亦頗る狭
 いことは事實である』

(一) ようこれのひのもの

りうきう國てたかすねあんしたそい、すへまさる
 王にせかなしは、うらたそいより、しよりにてり
 あかりめしよわちやこと、うらたそいのようこれ
 は、ねちのてたの御はかやりよるけにて、御さう
 せめしよわちへ、ちよくきよらくけらなかけらな
 めしよわちへ、大ちよもいかなしたやかなしみ御
 みつかいめしよわちへ、あさはたかすへあんし

碑文、候文、漢詩

ようこれのひのもの

琉球國新建至聖廟記

五十三

たそいかなしも、御ちよわひめしよわにあにあれ
 はと、千代萬代なるまでも、御なほのこらにしゆ
 るて、御さうせめしよわちへと、このひのものは
 たてめしよわちやる、この御はかのさうちは、う
 らたそいまきりより、ほん正月まねにきよらくか
 らめくへしと、み御み事たかみ申候

このすみのあさくならはほるへし
 万曆四十八年のへさる八月吉日

あすたへ三人

いけくすくの大やくもい
 よもたもさの大やくもい
 とよみくすくの大やくもい
 ちうふきやう二人
 あはこんの大やくもい
 こちひらの大やくもい
 いしふきやう一人

(二) 琉球國新建至聖廟記

夫以聖人而君天下、不如以聖人而師天下也、君天下

者澤及於一時、師天下者學凡古今來天之所覆地之所載舟車所至日月所照之處靡不被教化焉、噫豈偶然哉、蓋掌稽古危微之旨、堯以是傳之舜、舜以是傳之禹、禹以是傳之湯、湯以是傳之文武周公、至我孔子而集其大成、所以刪詩書定禮樂贊周易作春秋、使天下後世之君臣父子夫婦昆弟朋友、無不相安於名分、靡有亂者、較之君天下者、何如也、琉球遠在海外、去中國万里、宣若不聞聖道者、然自明初通貢獻膺玉爵、至洪武二十五年、王子泊陪臣子弟始入大學、復遣國人三十六姓往鑿焉、万歷間紫金大夫蔡堅、始繪聖像、率卿中縉紳、祀於其家、望之儼然令人興仰止之思、不可謂非聖教之流於海外也、至皇清定鼎、聲教誕敷、斯文丕振、較前尤盛時、有紫金大夫金正春、於康熙十一年議請立廟、王允其議、廼卜地久米村、命匠氏庀材、運以斧斤、施以丹雘、至康熙十三年告竣、越明年塑像於廟、左右列四配、如中國制、王乃命儒臣、行春秋二丁釋奠禮、既新輪奐、復肅俎豆猗歟、盛哉、從此觀軍服禮器恍如登闕里之堂躬逢其盛也、師天下之功、不於此而見無外哉、臣順則、奉王命紀建廟顛末、謹摛筆而記、以勸諸石、永垂不朽云

(三) 獨物語

一、國土と申者前以万事相計得置不申者不叶儀多々有之候、右條々之儀大略左に申述候
 一、迎當國之儀、大海之内隣國も無之一國立居候付而は、風干乏災殃相防候手殿兼而仕置不申は叶不事候
 一、異國船漂着に付而は、其人數相賄其船及破損候時者、仕立船を以差送候計得仕置不申は不叶事候
 一、唐之仕合次第指揮使擊使不圖致渡海儀も有可之候、兼而其用意仕置不申者不叶事候
 一、江戸立又は唐へ慶賀使謝恩使杯之御物入も兼而計得置不申は不叶事候
 一、御太子様御上國に付而は、太分之御物入前以計得置不申は不叶事候
 一、百年に一度冠船御渡來之時其御物入太分至極候、漸々相時置不申は不叶事候
 右數箇條之外御國元へ王子按司親方便者杯又唐へ進貢接貢差遣候入目之儀者例年之勤候
 一、唐世替程之兵乱差起候は、進貢船差遣候儀不能

成、或十四五年或二十年三十年も渡唐斷絶仕候儀案
 中候、御當國さへ能々入精本法を以相治置候は、至其時も國中衣食並諸用事無不足相違、尤御國元へ之進上物は琉物計に而致調達其御申上可相濟積候、若御政道其本法に而無之我々之氣量才辨迄を以相治候は、國中漸々及衰微御藏方も必至致當迫候儀決定之事候、右之時節渡唐斷絶候は、御國元へ進上物之儀琉物調も不能成言語道斷之仕合可致出來候

(四) 御教條

一人間之道と申者、孝行題目に候、孝行と申者、諸士百姓共、其身之行跡題目して、家中人數其外親類縁者に至迄、睦敷取合、尤御奉公人者、國家之爲何篇入精、又百姓者家業無油斷相勤、各件之勤を以父母安心させ候儀、孝行と申事候、若行跡不宜、或家中親類縁者之取合不睦、或御奉公付而忠義之心立無之、或家業之働致油斷、簡様之不届共有之候而者、何程父母へ衣食之類結構相備候共、父母安心無之積候

、此心得を以て諸士百姓共、孝行之勤致可執行事
 一本宗正統之嫡家者、則一門之根源に候、一門之儀元祖一人之孫々に而、骨肉一体之筋候間、如何にも睦敷取合、就中嫡家者何れに而其取持有之儀、孝者之大本候、上下共其了簡可爲肝要事
 一元服婚禮之儀、上下共分限次第如何にも重厚に可相行候、就中婚禮之儀者、夫婦之縁組に而、人間題目之勤候、此儀致疎略候得者、女人之節儀輕々敷筋相成、甚不宜候事、女人節儀之儀者、常々正敷相勤候所より、父子之道も正敷能成事候、右之譯往古之聖人別而肝要に被申置候、如何成雖爲下輩、女人節儀之儀、就中入念候儀可爲題目事
 一、夫婦之儀者、人運万事付而之根本候、此心得を以如何にも睦敷取合、何篇義理正道熟談致し、万事可入念候、若各存分相構候は、夫婦之道不相立、誠以家道之妨甚不宜事候、此譯得致致落着、万事計得入念、首尾相勤候儀可爲專一事
 一、兄弟舅甥之類者、天性之親敷者候、其妻々迄も此心得を以如何にも睦敷取合可致候、然共右妻々之儀依時に者各致勤違不和之基差起候儀も可有之候、且又

兄弟舅甥にも慈心に被隔天性之情愛確と致忘却候方も可有之候、此儀皆以愚痴之舉動人倫之妨甚不宜候、何れも天性取合大切存、互致情愛候儀可爲最要事

(五) 漢詩

○東苑八景

○東海朝暘

宿霧新開散海東 扶桑万里年飛鴻

渺魚小艇初移棹 搖得波光幾点紅

○西嶼流霞

海角晴明嶼色明 流霞早晚漲西巒

若教獨管詩人見 定作箋頭錦繡香

○南郊麥浪

錦阡繡陌麗南塘 天氣清和長麥秧

一自東風吹浪起 綠紋千頃映溪光

○北峯精翠

北來山勢獨嵯峨 葱鬱層々翠較多

始識三春風雨後 奇峯如黛擁素螺

○石洞獅踪

仙桃花發洞門開 猛獸成群安在哉

將石琢爲新白澤 四山虎豹敢前來

○雲亭龍涎

凌雲亭子有龍眠 吐出珠璣滾々圓

今日東封文筆秀 好題新賦續甘泉

○松徑濤聲

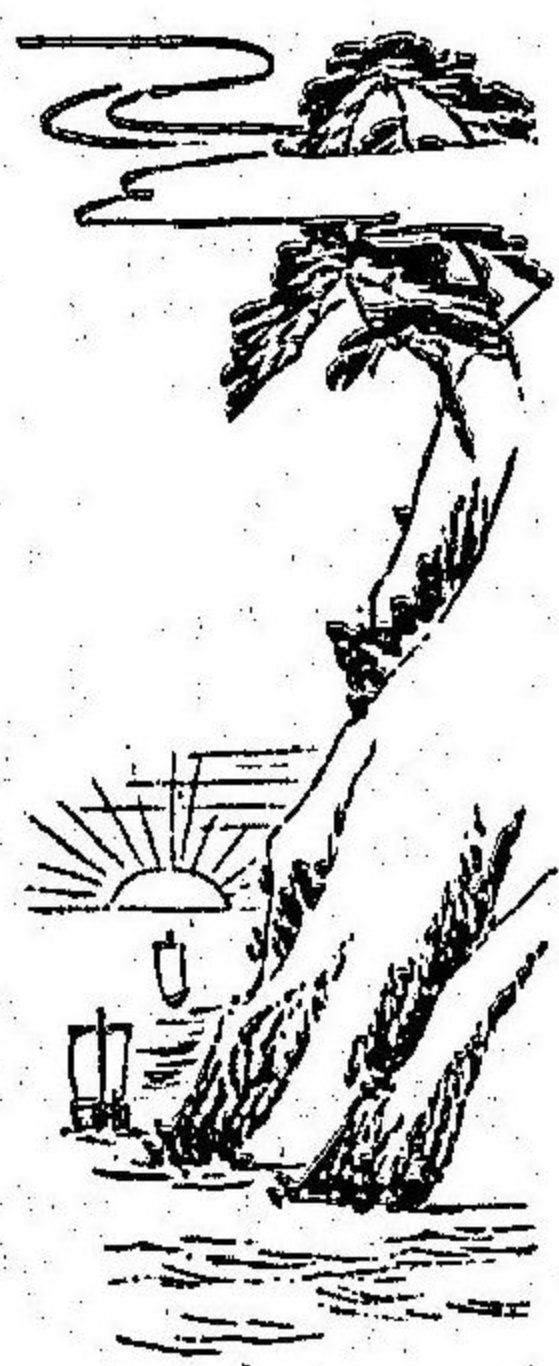
行到徂徠萬籟清 銀河天半早潮生

細聽又在高松上 葉々迎風作水聲

○仁堂月色

東方初月上山堂 万木玲瓏帶晚霜

照見皇華新鉄筆 千秋東苑有輝光



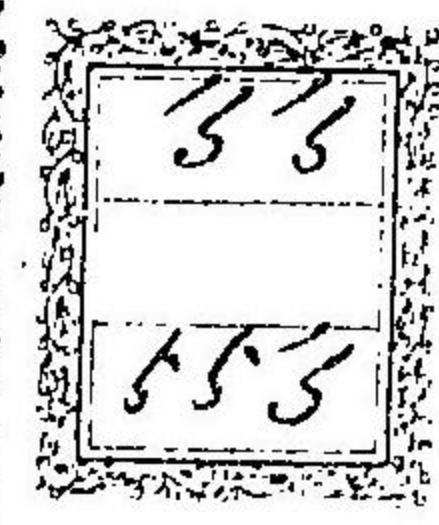
琉球の研究 下巻終

後序

予は茲に「琉球の研究」上中下を完結したが、實はほんの輪廓を畫いたばかりである、述べた事があまり多方面なものと、紙數に限られてなるだけ簡略にしたのと、筆が思ふやうに運ばぬとで、意味が充分に徹らぬ箇所少なからぬことは遺憾である、他日機會を得たならば、訂正もし増補もして、少なくとも今の三倍大にするつもりである、此書は、過去の琉球が漸やく人に忘れらるゝを惜み、現在の沖繩が廣く世に知られんことを望み、やがて湮滅せん事實を記し置て後世に遺さんため、身に少々の餘裕あるまゝ、道樂半分に書き綴つたものである、回顧すれば、予が

親しく視た琉球は、はや數年の昔になつた。此書の記事も大半は既に歴史の資料となり了つた。若しも幾十百年の後に琉球の當時を追想する人があつたならば、必らずや此書を以て一の好伴侶とするであらう。ことは、予の自ら信じて自ら慰めてをる所である。

加藤三吾記



観てく視た琉球は、はや数年の昔になつた、此書の記事も大半は既に歴史の資料となり了つた、若しも幾十百年の後に琉球の當時を追想する人があつたならば、必らずや此書を以て一の好伴侶とするであらうことは、予の自ら信じて自ら慰めてをる所である。

加藤三吾記

明治四十年六月廿五日印刷
明治四十年七月二日發行

定價金參拾錢

長崎縣北松浦郡平戸村二百二十五番戸

青森縣士族

著作者兼發行者 加藤三吾

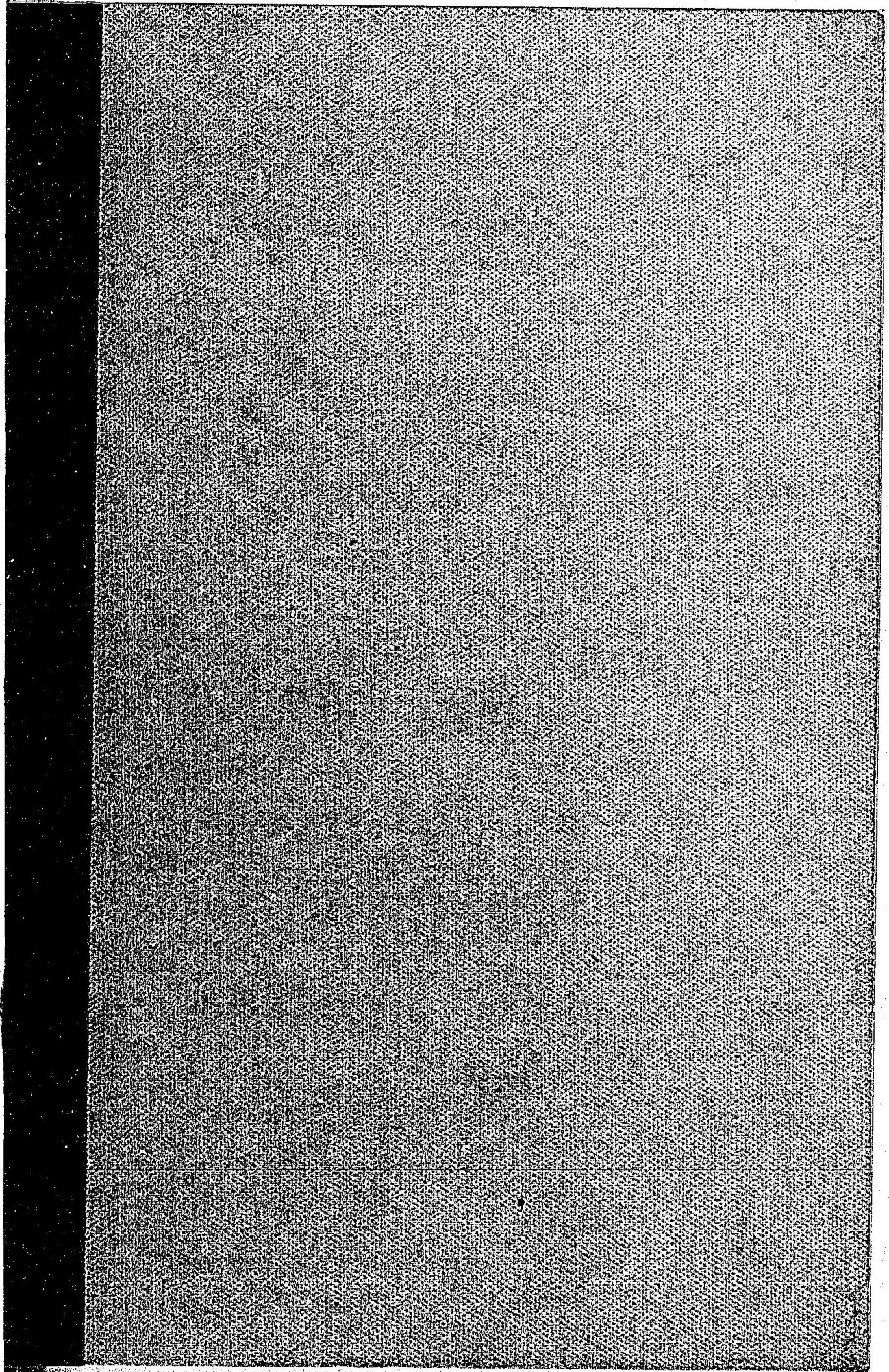
長崎縣佐世保市松浦町五十一番地

印刷人 熊澤武二

長崎縣佐世保市松浦町五十一番地

印刷所 魁成舎

版權所有



琉球の研究

下

加藤三吾

国立国会図書館

026352-003-3

291.99-Ka6

琉球の研究

加藤 三吾/著

3冊(下56p)

M39-40

ADC-4141

